大正十五年三月上浣起業

消閑雜抄

二

特別
イ4
1919
380

176648

消閑雑抄 二

大正十五年三月上浣起筆

○坊間書肆を過る例の如く二三雑書を購ふ、

三月三日

一文章達徳綱領　寛文版　十冊

此書ハ藤原惺窩の編する所、巻首に萬暦己亥三月一日朝鮮國刑部員外郎菁川姜沆の自長叙あり、惺窩の家系経歴を叙すること詳なる也、斂夫をして中華に生ん名儒の列に在らしめさるハ斂夫の不幸然れとも中

38- 9169

華ヲ生れず絶海の遐遠ニ生れ音韻を振発する八日東の章と云ふ、本名ニ就ては達ハ孔子の所謂辞達するのみと云ふヲ採り徳ハ孔子の所謂徳ある者ハ必らず言あるといふヲ取るとあり
此書文章の様式を数別すること甚之利れり、今ハ骨董ニ属する書なれとも日本書史中逸す可らさるの書なり、堤宮ヲ著ニ別ニ文章達徳抄あり余未た之れを見ず

一 新撰三十六貝歌合　一冊

此書三十六歌仙ニ倣ふて貝を題として歌合を収めたるもの和歌の下ニ貝の図あり元禄三年の刊行にて稚拙あり

一 鋭庵心経　墨帖　一冊

此書菅首ニ明和九年八月蘇の山良由の漢文自叢の長序あり、山良由ハ岐蘇福島の代官山村甚兵衛のことなり、書も文も共ニ佳也心経ハ葉書ニ脱凡庸ならず、而して葉書ハ鋭庵なる人の極めて擅意の荒し凡庸の筆

を以て叙さバ一喙唖棄すべきことなる
も名業其人を得て偏ぶ興味を感ぜ
さるを得ず、今其叙ぶ所を略記す
れバ、蛻庵初め飛州参議秀信に仕へ
秀信滅後信州に逃れ諏訪侯に謁
し諏訪の名家千野兵庫の門下に入る
于時天正十三年也、蛻庵頴異比な
く兵庫の家益を営くること少なからず
ある時蛻庵假寐其の一老狐なる
正体をあらはす、蛻庵奔りて
岐阜の興禅寺に詣り桂岳禅師に
飛騨の人にして秀信と縁故ありて因て

十二行

寺に留まること七年、同門漸やく其人なるあ
らざることを知る、嘗て飛騨安国寺に
書状を持せて遣す途中、某民家に
宿す、夜酒中に人に正体を看破され
終に銃殺さる、其の夜酒せし所ハ日和
田村也此村ハ七年疫癘流行の人多く
死す、村人狐の祟となし、興禅寺の僧
に嘱し厚く供養して漸やく無事を
得たりと、此話ハ蛻庵の害すといふ
夜窓鬼談に実初新説にもあり
其有怪談なり岐蘇にも喧伝の
事実なし

一 源氏物語新釈抄出考　橘　一冊

此書ハ加茂真淵翁の釈を摘て編
考したるを文化十三年正月浪華
の石津亮澄の跋を刻しつゝ世
源氏物語研究入者熟知のものなれ
とも今獲易からず鼇頭注するにはそ
翁の此物語に就ての説を挙け
ける

○複製ものくらし　西鶴自筆本の複製を配本し来る

三月三日

一 俳諧胴ぞ将　一冊

西鶴の自筆俳諧書ハ稀覯中の

稀覯なり、此書ハ延宝六年三月浪華
の湾ニ舟を浮べて西鶴由平（前川）西国
（中村）の檀林派の三俳人が心のまゝに
吟詠したる三百韻の内西鶴自筆
の分の文を刷行したるものにし巻首
に西鶴の序あり巻末西鶴の跋文
と印あり、花田氏末に跋あり、右三百韻
延宝六年春於大阪判屋座中
ニ付西のつされありけるもの也とあ
るが西国の筆にこし、此書ハ版刻の最下
りしことあこ明らかなるが版本を写
して見しへならし刻さんするしとて見

なり、西玄ハ中村庄兵衛一號杉葉
新豊後日田の西豪なり西鶴の人
なそ大阪ヘ來りて出でし折の俳諧
と思はる、此書の由來ハもと西
玄の家ニ傳はりしもの後同人の三
孫氏三郎の傳へしを他の二書と共に
購ひたるもの也今の花若丸屋
後彦の手より出でしなり、他の二
書と云ふハ一西鶴自筆の俳諧之
口傳と西玄自筆の西海の記とあ
り、此書の原表紙ハ巻物なるを冊子
体ニ改めしなり、西鶴の書の四ケ所と

なすべきハこれなり

○此日（三月三日）又下谷浅草の古書店を漁りて二三の稀
覯書を購ひ入る

一 長崎地圖　一折

安永七年八月 長崎勝山町大畠文次右
エ門出版 圖中ヲランダ、ナンキン、シヤム
等の入舟の圖あり、諸用船番船段船
注進船等をもあり、並ニ藏書印花押
朱字の花押印記あり、安永ハ明
和ニ次き天明の前なり、此項の長
崎圖版多稀也珍とすべし

一 春日廿四興　一册

寛政七年版 支那の廿四孝の図に題して芝んく狂歌あり巻首に真顔の序あり図ハ探龍の画する所清涼亭菅伎の編する所也其の所り本と見へたり

一 月園翁旅日記　二册

月園ハ富田真澄也此書ハ岡田家蔵書の印記あり、筆跡真澄に酷似す著者自筆と審定し得べし月筑波日記杉田日記上総日記等九種の紀行を収む

一 尋古人名寄賢記　一册

名乗の反切を記したる字書なれさんど標題甚奇也且つ北香寛文三年に刊行せられ目蓄者ハ依酒の僧なり序文の署名に依酒寺僧なり賢太愛とあり、又賢記ハ蓄者の名なることとしられる、巻末に依酒権阿長善之太愛とあり、寺の不在地も今分明ならず、珍書なるも無名の古版として聊か味あるべし

○先頃帝大の図書の陳列中に開成学校時代の記録が一冊出てゐた、それに陛下が同校へ御臨幸あそばされるにつき学内有志といふく折合せたことなどが記してあつた中に当日学校で奏楽をやる旨の記録がのつてゐたが、それは雅楽が三組であつた此の日御臨幸は明治四年とあつたことと思ふ多分第一回の御臨幸と思はる、当時はまだ海軍の楽隊も無かつたらしい、陸軍での曲は洋楽馬車で其の写真が陳列されてゐた、又別に一枚摺りの開成学校一覧と云ふが出てゐたこれは明治二年とあつた校が、初頭に加藤弘之の名があり、終りの方まで校長たる収

めてあつたが、コンナことは今はどこを捜がしても無いことのやうである。

三月四日録

○婦人が全身赤裸で宴会の席に出ることは西洋の世界でもまれ珍らしくないことだが、日本では昔しから義人と無いことである、三四年前の節分の豆の晩で加賀の横山が築地の瓢家に友人を会した時、裸体の女がダンスをやらせたが、其時自分も席にあつたが、此の女は日本人であつた、勿論陰毛もあらはに一幅の薄物を手にして踊り跳ねた、しかし陰毛は実のものではなく假托のものであつたが、流石に実のものをあらはし出したが、鬱作りものを装ひ置いたことが、坐に在つた藝妓によつて看破された、此話はついこの頃牛込の新福井という

ル印刷の同業に招かれし折、余興として西洋婦人
二人に裸体のダンスをやらせしが、此時ハ臆面もなく
正物をあらはして満座を驚殺しけり。此の二人ハ
ルーマニヤ人で、漂浪日本に来り今ハ妓籍にあるの
女が、其の素性ハ分明しない。年の頃二十二才位の
がりりイと云ひ二十才ばかりのチエリーと云って、日
本へ来て既に二年余にもなるとかで多少日本語も語
る。席に在っては正坐も横も出来るほど慣れてお
り。長しかし方がダンスも上手で体格もよろしく、彼女等
ハ赤裸に全身を露はすのを恥とも思っておらぬの
か知らんが、観者をして寧ろ悲哀の感に堪へざら
しめし。露西亜の革命で本国を去り当地にて困

外に漂泊してゐるらしく階級の高いものか交
つてゐる。知らず此の二人の素性も或ハ由あるものなら
ずや。局部に陰毛のあらざるハ尋常平凡の事で珍と
するにたらで但し其れを和人の方とくらべても立派
なる光景を見てハ一種異様の感を起さしめ、男子
に対してハ一種の脅威的事を覚へしむ。
○古本屋に於て此人の句帳のあるを見、懐しく思ふ
て購ひ帰り翻して故人を偲ふ。此書ハ此人殁後
文禄堂堀野書店より出版せるもの、明治四十年の
発行なり。今より二十年前のものなれば得がたき
ものなり。句の主ハ吾郷の俳人
随と遊びし故の吟詠なり。附録に俳諧時評

「風流妄語」少年行其他収めあり、然も釣七山人好また一種の趣味あり。

三月五日記

染工としての友禪

荻原又仙

上下を通じて祖先を重んじ慕ふのは、何地の人の意も同じ事である、特に自己が衣食の資を得る稼業の、鼻祖また其道に名を成した者をば調べ來つて己が業の光彩を致さうとせぬものは無かるまい、予が友禪染の業に就て鼻祖と稱へられる友禪といふのは和尚であつたか、職名のみで有つたか、當時素より微々たるものであつた爲め、其の傳ふべき事蹟が明かでなく、底で種々と遺されてある物に就いて調べられた所を稼業の縁あるをもて玆に記し寄せて見る。

老友であつた故益田香遠翁は、予の爲めに一文を寄せられたのに、史料に乏しい友禪齋の事は江戸時代板本の挿画其の他殘存する遺品の落欵を集めてみると、扶桑扇工友禪圖、洛陽画工友禪子、未明友禪圖画、鳳城東友禪筆、法橋友禪とあり、其姓はといへば宮崎とも深江とも日置とも云つて判然せぬ。加賀染の仕方より發明し絹帛に描くことの技を得たもの云々。

ところが京都の知人から報じ呉れたのは、染色の本場だけ、土地の人々は隨分其の調べに熱中し、友禪の墳墓が京都中にあるべきものだとて、土地のあらゆる寺院を探査し墓地を物色した揚句、倘し禪の字の有る墓碣でもあつたら、上の字だけを磨り滅らし、それへ友の字を彫り入れてゞも、友禪の墓とせねば氣がすまぬといふ勢であつたが、注文通りに成就せなんだとか。更に別の方面で調べて、友禪として書籍に載つてゐるものを見ると、西鶴の五人女に『柳屋の下緒、友禪の扇』といふ句がある、夫から考へると友禪の描いた扇は、京洛名物の一つとなつて扇の落欵が、友禪の外に友仙とも友善とも、又由禪、遊仙、幽仙、と色々に書かれてゐるが、恐らくさう幾人もあつたものではなく、眞個の號は友禪で、扇工をもて名を成し、後に染屋の差物屋をも職としたものであらう、差物屋といふのは衣裳の文樣を地の色の染上つたところへ、細かい彩画をなすのである。友禪の姓は宮崎氏だといふ人もあるが、祇園神社の奉納額によると日置氏と署してある、孰れが本姓であるか疑を存する、單に友禪と云つた人は扇工であらうか、染物師であつたか、其れは差措き、其の身元を考査すると、能登國深江郷の産で、一旦加州金澤に出で、繪事の修業をなし、更に京都へ上り糊口するに及んだもので、京都は何方に在つたかといふと智恩院の山門前に住居し、其後に堀河に近い

醒ヶ井に移つたものらしい、其の移住したのを以て見ると、老に及び専ら染物の上に盡したやうだ。最初金澤へ出たのは、彼地の有名な狩野守景の門で手ほどきをして貰ふ爲めで、更に修業の慾から上京したらしい此等を以て案ずると画工としての扇面描きがもとで、更に差物かきとなつた順序とする。

友禪も晩年は故郷懐しく金澤へ再びもどり、加賀染の技に從事し、其地の土となつた、所で其姓は宮崎で聞えて居る故にそれに定め。近く金澤市で調べたには同市の龍源寺で發見の墓碣及び過去帳に據つて、其沒年月を寶暦八年四月十七日と推定を得たまでで、遡つて生年も分らず、享年も判らぬのを、京都で發起された友禪史會や、金澤の墓碑保存會が飽まで探究を續けた上で、偶然これも明かに成つて來た。

加州小松にある旅亭主人對塔庵なる俳人が手錄した『諸國俳士人名錄と肩書ある花の屑と題した』小冊子二十八丁の裏に

友禪…………本町烏居際、宮崎友次、染繪カキ

元文元年六月　　八十三歳

とあつて、月ばかりで日が記してない、併し之は前にある十七日を正に瞑日とされよう、墓碣や過去帳にある歿年の寶暦八年とあるのが烏論となるが、能く繰合せてみると元文元年より推して寶暦八年は友禪歿後二十三年に相當する、其の年忌をもて遠縁の人であつて、金澤に染業を繼けて居た太郎田屋某が追福のため建碑したものと察せらる、享年八十三歳とすると生年は承應三年なのである。

此の歿年と生年に就いて集めた材料となつて居る諸書を其年齢に對較すると『一代男』が天和二年で、廿九歳、『三代男』が貞享三年で三十三歳、『餘情ひなかた』と『和歌物わらかい』が元祿五年で三十九歳、『梶の葉』の寶永四年が五十四歳で、每々友禪の談に引用される帝國博物館所藏の紫式部染圖軸を太郎田屋茂兵衛作が享保五年は六十七歳なのだ。それから對塔庵手錄の『花の屑』に友禪の句として

京の事また口へ出る餘寒かな

毘沙門神主方へまかりて

繪にかいた梅にも欲しき匂かな

北村追悼の句

過た跡さひしさ増すや時鳥

右三句がある始めの京の事の句は彼か落款『洛陽産』と銘してあれば多くの年月在京した事が認められる』爰にて又た香遠翁よりの報道を記さんに、金澤市に墓碣發見されたまでの端緒といふものは、前段帝、博、に藏される、式部の圖に染所茂兵衛とある落款から加越能史談會が圖らずも、染所茂兵衛は舊藩時代に金澤の紺屋棟梁太郎田屋の四代目で、享保頃の當主なる事が判明したので、愈同家の上を聞き質すと、廢藩後は舊姓長谷田に復し、今猶市中に其業を營みゐつて、當代の與一といふ者に熟談し、遂に菩提寺の龍源寺過去帳墓碣をも見出すまでになつたのだと云々されて居る、

重ねて京都友禪史會の負じ噺には『花の屑』中洛陽産と號の頭にあれば、友禪は京の人に異議は無からう彼が金澤へ腰を据たのは、五代の藩主綱紀相雲公が美術工藝を大に奬勵なされ、それ〴〵細工所を設け、其道の名工を召された事は元祿初期にあれば、友禪も其時分に徵され、紺屋棟梁なる太郎田屋に在つて、加賀染彩紋の技に老を送つたものだと、どこまでも京の籍を脫きたがらぬも予には耳立ちて聞ゆ。

これも添へて記して置きたいのは、友禪染に俱なふ一陳糊といふもの（溫飩粉と灰を和した糊）は久隅守景が工夫したもので、金澤の九谷燒の下繪に要ひ、亦、加賀染にも用ひた、守景の別號を一陳と云ふたので

、此糊の名稱となつたと、香塽翁の附記なれば、敢て適否の沙汰の限りでない。
斯く友禪に就き詮索を、諸益友より聞くことを得て後々の話材にもと記しなして

攀のぼる苦も忘らるゝ紅於かな　野菊莊

○詩仙堂ハ石川丈山隠栖の處で、京の修学院村大字一乗寺村に今も存じてゐる、先哲の書斎で残つてゐるもの、[redacted]最も古るい[redacted]一つである、自分が此處を訪ふたのハ二十数年も前の事で[redacted]、委しいことハ忘れたが、四五年前フトしたことから、詩仙堂の考証と云ふやうな材料を手に入れた、其の材料で丈山の書風や詩仙堂に漢晋唐宋の詩家三十六人の[redacted]像[redacted]賛[redacted]を録されて其の由来をも知ることが出来た、と云ふのハ何か、寛永頃の古記録でも得て、それから隠れた事実を探したかと思ハれる日も知れぬ人が、そうでハなく支那から一種の材料を得[redacted]た、自分の臆断では[redacted]あるが、詩仙堂の源も丈山の書も確かに源流ハ支那であることを証拠立て得る材料が手に入つた、それハ何にと云ふと、黄石斎石養山居帖である、黄石斎ハ[redacted]黄道周と云ふ明[redacted]の忠臣で[redacted]清朝の為めに順治丙戌刑死した人である、[redacted]石養山荘といふが此人の別荘で、[redacted]此帖の首端の自叙を掲ぐると、別荘の内に十朋軒と九串閣といふ二室がある其の二室に道周が[redacted]古賢哲五十六人を選び、それぞれ讃を作[redacted]り自から書いて四壁に貼[redacted]り

十二行

曰ク群賢ニ思を寄せたとある、更らに委しく
云ふと十朋斬まで二十六人九峯閣まで三十人の賢
哲の讃を題したのである、其題賛を黄樞と云
ふ人が石に刻して墨帖としたのが此の石養山居帖で
ある、黄道周の草書ハ何人も知つてゐるが、八
分体の楷書ハ餘り知れてゐぬ、今ここに掲げた
石斎の書と文山の書とを比較對照して見ると、何
人も其の酷似の甚しいのに驚くであらう、蒋欽
を捨ふたら我人と彼此を辨し兼ねる程である、文
山ハ誰れの書を学んだか、自家の獨創であるかこれ
迄研究した人の説を聞えたことはないが、斯くまで
酷似して居る所から考へて、此の書が文山の獨創

で偶然の似寄といひ難い、而も誰れかを学んだ
とすれば石斎と云ふ人だといふの外ハあるまい、石斎ハ明
忠ハ節の人として當時我が識者までひとしく崇敬さ
れた、文山も亦崇敬者の一人であつた事ハ相違ない
そして崇敬の餘り書も之れを私淑したのではあるま
いか、當時漢晋唐宋の詩家三十六人を撰んで
其の畫賛を堂中に置いたことも石斎の為すまゝ
倣つたものであらうかと思ふ、~~幸然~~
~~我~~日本でハ歌仙卅六を數へる例がある、其の圖像
を壁に掲くる例もある、國歌の代りに漢詩卅六歌
仙の代りに卅六詩僊を思ひつく位ハ漢学の趣味の深
かつた文山に不思儀ハ無いと云へハ云へるまでゝある

十二行

けれども石養山居の墨帖があつて丈山が其書に私淑したことなどを思ひ合せると、詩仙の題額も気張り石翁に倣つたとの推測を禁じ得ない。此の事のか、此の墨帖すれ刻年を缺いておるが、或ハ當時丈山ハ此の帖を手に入れ之れを金科玉條として書も学び書翁の二三近まりも之れに倣つたのでハあるまいかと想像が、高は想像を馳せて見ると石翁の石養山荘もどことなく丈山隠栖の凹凸窠に似寄つておるらしくも思ハれ丈山の人物と高節も石翁に似て居る様にも思ハれて、一脈の通ずるものあることとく興味を覚えさせ、係しくんのまで石翁と丈山を比較したら其の書の源流を探つたら、其の経歴人格等を比較して論して見たら面白からうと思ふけれども其れハ本題の趣旨でないから今ハ唯だ書翁に因ある人たことを言ふのみにとどめておかぬ。因にこれが黄石翁も石丈山も同時の人であるが、石翁ハ明末順治二年に死し、丈山ハ寛文十二年に死んだから、石翁よりも十二年後まで生存したことになる。

此稿旅館にて翁に載する為めあまれる。

三月六日録

◎三月六日 散策中右の図書を購め

一 尊前集 一冊

此書二巻合一冊明の萬暦の出版で係

る原刊本にて版式鮮明也花月集
とこれとは姉妹書なる所花月集ハ
前日手に入り此書の欠くを憾とせる
が不図手に入りたり、但し憾
む事は版式同しからず大小亦異なる
ること也

一 游東厳録　二冊

松崎慊堂の紀行也、若し批評徳
造書は此の上梓に係る、慊堂の文稿
何故か刊行されず此書のことき
ハ輕き筆觀のものなる、流布本
刊行されたるもの[illegible]

二文集あれども[illegible]此年の上段也
此書版下書にて可也
此紀行松崎を覧る数日来の眼目也
流石に紀行文章甚だ凡ならず六言の
詩を採するも[illegible]慊堂此体得意
とせしか旅中到る處古人あり記す
古きあり寂寞たる漢文家紀行
之に及ばざるなるべし

○ラジオの放送が始まりてから音楽家なる者を聴くべき
設備が二十不まひ[illegible]音楽を聴くことはなる、児
が三味線をひくのでも放送局と契約せんも我国とちて

十二行

放送をしてゐるけれども、先生は全く無頓着でゐられ然
るに放送局から度々自分へ当事者が訪ねて来
て、いつも不在の為め、実は未だ断わるまでもなく
面倒を免がれてゐられたが、三度目には友人からの紹介状
を持參して來られたので、ノッピキならぬ所から、終に一
場の講話を為すことになり、日を廿一日の夜と約した、
のであるが、聴いてゐる者はないから呼吸も合はぬ、前年大
隈侯が議会を解散され総選挙を行つたとき
には、自分は大隈伯後援会の会長であつた関係
から大隈侯に選挙に関する演説を蓄音器に
入れたことがある、其節侯の演説を紹介するの
辞を先づ吹込んだのが自分で経験があるやうなも
の、是れは僅かな文章に過ぎなかつた、三十分乃至一
時間許りの講話を為すといふならば興味のある話
題を選ばねばならぬ、談話の工夫も考案を要
する、昨今何を話すべきやと思案を凝して居る、
或は大隈侯傳記の賤務に就て抜録をやつ
て見ようかなど、も考へて居る、此の話題ならば
人に興味を感ぜしむるなどのことは出来ないが、
兎に角四年間表向き誰れにも云はないことであ
るから、多少の注意を惹くかも知れぬ、一場の談話
が六十萬人の耳に入るのであるから、宣傳としても
小規模の機会である、後会ひかり積つても宣傳の
徳はあるに相違ない、昨今日課のことで傳記

の称えを讀みてある折柄でもあれバ話題の
選擇とするも自然こゝに傾くけれども当節もあ
れバ熟考を一寄する
○元の袁桷澄懷錄及び清異錄に云く　三月七日記
中宗朝韋武間為雅會、各携名香、比試優
劣、名曰闘香、韋温挾椒塗所賜、常獲
魁。
闘香ハ元から行はれてゐる、去かし日本の闘香といろのことく
くのことが工夫されんとハ思ひ得られぬ、
導生八牋に多く香のことが載せてある中に論
香に云く
香之為用其利最溥、高隠坐語道德、焚
十二行

之可以清心悦神、四更残月興味蕭騷、焚
之可以暢懷舒嘯、晴窗搨帖揮麈閑吟、
篝燈夜讀焚以遠辟睡魔、謂古伴月
可也、紅袖在側、密語談私、執手擁爐焚
以薰心熱意、謂古助情可也、坐雨閉窗午
睡初足就案學書啜茗味淡、一爐初熱
香靄馥々撩人、更宜醉筵醒客、皓月清
宵氷弦戛指長嘯空樓蒼山、極目未残
爐熱香霧隠々遶簾又可祛邪辟穢
とこ
闘香の技ハ日本に於て頗る複雑の發達をなしたり
開香の仕様ハ精しくあれバ略するとして闘香の●ま

興を添ふるやうに工夫されたる物に就て云ふべし、全体
開香も勝負を争ふものなれば其の趣向双六に似た
る所あり、双六は拾ては勝負の経過を表示するやうに
道例目程々のものを書きたる手面の絵を用ゐれ
ど、開香は海辺に貴族の玩びなる巻の、手筥の
絵の代りにまず心で立体のものを究から割のことを
人物もあれば或いはいろいろの小道具もあり、又背景を見る
べきものもあり、或いは物語から或いは和歌から或いは歴史
上より或いは風俗などから意匠を案じいろいろに工夫
されたもの、其の種数は実に沢山ある。そして人物
も小道具も背景も極めて小さく且つ精巧に
作られてゐて、開香に一段の興を添へることになつてゐ

十二行

る。例へば羽衣香と云ふは浦島の故事を取つたもので
ある。釣人の人形一つと天女の人形一つが人物で、衣を懸
ける松が芥の枝に作られてをり、羽衣は紐が七あ
つて其れに紐がついてゐて、松にかけられる様にしてあ
てある。此松を盤の中央に立てて盤の両側に溝があ
つて二つの人物を両側に置かれ勝負に従つて進退
するといふが此趣向である。小道具は見るべきものと
松と羽衣である。又拾貝香といふのは盤の上に三十六歌
仙に擬し三十六の貝を置くのであるが、盤面には
蒔絵で海波をあらはし陸を梨地に鏤して貝を十
八づつ陸と海とに分けて位置よく置き勝負を表
示する趣向で、此の盤の工夫と背景を見るべきである

だ。常体これに似た背景はいろ／＼ある。例へば曲水香と
いふのは川の流が金で時めいても一ッの山叢花
が中央に横つてゐる。それが決勝點である。盃を近
退して勝負を表示するのもある。蛍香といふのも
盤の中央に水の流がある。コンナ句合に盤に綴るばか
りでなく、別に背景として立体のものを飾ることも
ある。乃ち木樵香といふのは山の盆景を作つて盤の
前方に飾るのである。又源氏香の内で関屋
香は逢坂の関と瀬田白川を形どる物を飾り、橋
を飾る。或は乙女香は花の瑞籬を飾るし、橋姫香
には箱庭の上に大姫と中姫の人形を飾るのて羽車
屋をかけて飾る。又は曲劇の大道具に近いともいへよう。

盤は大概長方角であるが円形のもある。立字と橘貴
妃の二扇軍香の盤も円形であり鴛鴦香なども円形
の中に立方に溝を作り溝外に水を画いて居る。
又舞楽香には慢幕一張と楽太鼓一つを飾る
これも劇を思はしめる。
以上は香道に所謂立物の一斑を挙げたのであるがいろ
く故事を表した意匠の内にも、ろ／＼凝つた工
風がいくらもある。例へば陸奥香では人物が西行と
能因で、それが東西に立別れ西行の方には道芝の松が
あり宮城野の萩があり、能因の方には武隈の松と白川
の関がある。西行能因の進退は松や関所に阻止せらる
るやうになつてゐる。丁度双六である。地點で休まねばへ

ちるぬ名があると同じ言遊びである。蟷螂香すと造型の中央に蟷螂が画かれてある一方には僧体の商人が琵琶を弾し一方には直衣を着けた人物が琵琶を弾してゐる。これは昔し妙音院の師長と妙観といふ僧と孝定とが琵琶を弾し蟷螂を何んまで引きつけたものを勝とする故事に基いたものである。孟嘗君が鶏の鳴真似をさして関所を通つた故事や、玄宗と楊貴妃が双方に別れて侍女に花の枝を持たせて花合戦をしたといふ故事や孔明の八陣に倣つた複雑の趣向もある競渡香などは唐の表民の競渡の詩から工夫したもので、艘の両側に支那風の船が白帆と赤帆を懸けて競漕ふてゐる。

そして双方の旗に袁氏の詩二首を分書してゐるなどことに巧みであつて唐風の意匠もいろいろある。日本の故事風俗などを思ひ寄つたものでは鶏舟だの蹴鞠だの鷹狩だの賭弓だのの枚挙に遑あらざる程あるが、中に複雑なのは黒木香などである。これは黒木を頭に戴いた賤の女が同じく黒木を背に負つてゐる[illegible]牛を惹きそれが五組行進するの途中に枝折戸が飾つてあつてそれを通りぬけるのであるが、それから決勝點である[illegible]の極点に到ると塀重門が飾つてあつて、それに入る其時黒木で代表する賤の女に花の折枝を持たせて後の巻物を持たせる、[illegible]女と牛が同時に到達したはうが門を開かるる[illegible]

てあるが香の簡古の巧拙や牛が後れることもあるので、其の
面倒な處に興味を持たせてゐる、
○筆を多く集めて其の筆譜を作り上げた人は市
河米庵である、米庵が此の筆譜を作るまでには多
く筆を蒐める為め努力したものらしい、自分も偶
々筆譜の稿本とも見るべきものを手に入れて珍
蔵してゐる、それは筆の圖へ書いたが各筆に就て
それぞれ考証があるが、標題は有筆譜と
ある、米庵自筆で二顆の印が捺してあるから
疑へないものである、こんなで見ると米庵は筆
譜を編さうとしたこともあつたことが窺はれる、米庵
の集めたものは此の支那筆で筆譜に登つてゐる

のもの、ペーパーまで拵へてゐる、軸を拔いて放さうとした
ものであらう、自分も此の類筆に徹つたことがある、
それは今からも十五六年前のことである、利庵米
庵の拵ふ實用の各筆を多く寄せることが
時代の関係で不可能であると思つたから、筆管
本位のコレクションをやつて見た、筆管は其の
材料や彫刻や休漆其他で種々の意匠を凝し
たものが少なからずあるので、百種別様の意匠
のものを集めることを志し、三年ばかりで略々
る二三十種を蒐め得た、餘りよいものは多く
なかつたが、さうし百種以上種々のものをならべ
て見ると、種々の意匠が陸離として一種の観

十二行

味を感ぜしめれば、容器に就て思ひ付いたのを述べ漢法醫の藥籠が割合に精巧に出来てゐて四五の抽斗があり、筆を納れるもの屋臺見ひあるから、其の箱をいくつか撰し得て、之れを装置し時に出して玩んだら、それがある方面に少しくこえて態々見えるは訪ね来る人もあつたが、筆筒丈を集めるものは余り他には無いとみえて、珍とされたが、要するにこれも骨董趣味である。筆は文房具の内でも最も大切のものであるから、古来筆者は意匠を凝らしたことは一通りでない、僅に凡百種位丈を蒐めても其の意匠の多様なは一驚を喫する位である、蓋し千種も寄せればならば一億具へるのであらう。中には飾り筆として作られたものもあつたが、純日本趣味のものもあつたやうに見えは公卿などの蒔絵の硯箱に釣合ふ様に作られたもので文張りの精巧の蒔絵が施されてゐたが、余り好事家が故らに物数寄を凝らせたと思はるゝ類もあつたが、前年家を始めた時はすべて売却したが、相当の價と云ふのは二三本かの堆朱の筆で他は二束三文であつたが、あとで考へて堆朱のは売却せずに置けばよかつたと思はれ、堆朱も價こそ高けれ、平凡のものでいつでも得らるゝものもある、却つて價安きものに高雅のいろいろのものがあつた、誠に惜しいことをしたと今考へても

遺域の思がある、これを集めた頃不律庵と云ふ
を以つて書室の號としたこともあつた、三友草池
晩翁が書記を作つたものが今も存して居る。不律
は筆の異名で、律せられない吾儕生活が自分
の好む所で、筆に藉りて不律を以つて吾性格
を現はしたいと云ふので此號を命じたこともあ
つた、此頃號總書窩と叢の事を書くことを
嗜さん、記臆を辿つて曾つて集めたるものにつき
聊か材料や言道を書きつけても見る、大略
左の如くである、すべて個物なるものは書いても見る
とあまりおもしろくないへ、実物を見てこそ初
めて興味を感ずるものあることハ言ふまでもない

十二行

い

羅漢竹

竹

此も筆道 但し種々言道の異つたものがある

竹節をあらはしたものが多くハ二 （羅漢竹といふ）
節あり 竹の上頭をサヽラの如く細く
したるものも代へたるもの 斑竹筆もある
種々あり 朱斑など美なり 亂の如く
編みて筆管としたるもの 竹箋
するもの 刻字●を以つて雅味を添へること
が主となつてゐる 心経を刻したる 赤
壁の賦を細刻したるもある

木

木ハ各種を用ゐてをる黄楊もあり白檀其他の香木もあり、樹皮のあるままを筆管とされのもあり、櫻の皮を張つたのもあり紫檀ハ普通に用ひらる、細竹のまゝ萩を木地のまゝに用ひたのがある、装飾ハいろ／＼あるが最も風趣のあるのハ透し彫を精巧にしたもの明代のもの至て珍也又かし彫に限らず高雅の彫りの書があつて木地のあらはれたもので趣味がある、木に漆の細工のあるのハ勿論多い

がそれも漆の部でいふ

漆

全部漆を材料としたものが堆朱であるこれハ各時代のものがある、古いのと明代のもので清朝の作ハ出来が下る、其の内で古代の高いのハいゝものがある、勿論細かな彫刻がある、黒の漆でも同じものを堆黒といふ、かりといふのも同じものであるが彫刻の文様に特徴がある、緑漆こもので尚端である、総体金泥でぬりつぶしたのがある日本の貴族に用ひられてゐる、金蒔地の

上等な漆に金をかけたのも百種ありと
云はれて居る。沈金といふのがあり、擬堆朱
があり、外国の塗り方を摸したのに、ゴマ
手があり、キンマ手がある。其の一種の
風韻がある。ゴマ手とは三色若くは五
色を以て塗つたものである。蒔
絵の施してあるものは概ね日本の貴
族の料である

陶

陶瓷のものも甚だ多種である。萬暦
赤絵のもの、多くは龍の紋様がある。
染付のものは山水の文様のが多く

紫泥や黄瀬戸や擬青磁、雲鶴
象眼も稀にはある。日本のも陶工が
やつて居る。宋元の国雅のものは且
つ保存も国雅である。壊れものの事は細
い染付の筆を得ることは甚だ難
い。随つて其の類のものは其足しても價
が不廉である。又茶家が珍重するから
染付を珠重するから價はこんなに高めて
高くなつて居る

水晶

玻璃（ガラス）

硝

白硝、青硝、紅硝、何れもある。紅
硝も青も大中稀にもある。彫

刻が至難であるから多くは無地である

石

瑪瑙で作つたものが称へられて居る、玉と云つても質が軟かであるから東洋画や文様が刻されてゐる、硝子と共に一欠点とも重量のあることで、飾り物たるを免かれぬ

鐵

明珠風の製作で軽く出来て居る、無論中には重いのもある、自分の得たのは何れも銀象眼があつた

銅

宣徳風の黄銅やサハリで出来てゐるものがよろしい、塗金のものもある、これも軽く作られてゐる、勿論中空である

七寶

金銀

銀製の普及品は手に入つたが金製は手に入れたことが無い、併し純金製の無い筈はない

牙 角骨

割合に多くあるのは牙製である、純白な木地をあらはしたものが高雅である、朱漆を用ひた文様のある

竹質

のは材が概して勝つてゐる、彫刻のあるものも勿論いろ〳〵ある

草

日華草といふのが一種の草がある、これは細い葉が莖の上頭に叢生して組の如くなつてゐるのを利用して乾燥して筆に用ゐるのである

紙

唐紙や奉書の如き紙を巻きて穂のごとく固くし、上頭をばさくと制けても毛に代へれ、あれ、紙筆と云ふのである

毛筆

鋒山

毛を受ける所のなくなれるのが多いのは勿論

材料別に數を立てる大体十二種あるが、これを自分の僅々のコレクシヨンの實驗から擧げれば左の通りき

ぬ尚此外にもあるかも知れぬ

形も無論いろ〳〵もあるが、大体は眞直のが多く、時々は筍の上頭のふくれたのや中程のふくれたのがある、鞘も中のふくれたのがある、古るい筆は多く鞘が離れて無くなつて居る、鞘が無足しなければ具が無くて可成其同じものが對をなしてゐないが大ていのものはこれを得ることも困難である、銘や年號のあるのは頗る稀れであるが、其の稀れにあるのが珍しい、或は滿洲文字が刻され、梵字の刻されたのが

さへもどかしくある

三月十日録

○三月十日朝来雨あり去る宗蕭氏の招倍宇大の片
山手寺坊、北沢田中青山伯を蒲原の別荘に
訪ひし折、余にいろいろの儀言ありし氏これ取り次ぐ、
曰く前年刻書を得て早稲田の図書館に珍蔵
する天保其他の古文書十数通を伯に上げしも
複製すべし、曰く拙著頼山陽に就ての談話
曰く伯近年多く著集に於て維新前後勤王
の士に成る墨蹟数百を早大に寄附すべきな
つき筆者の忌辰毎に必ず其の墨蹟の展覧
れ申すものを掲揚して私の敬意を捧ふ

十二行

べきこと、未寄稿を交元寺余の新縁の交一
滴の精まで蒲原荘に来るべきことなどか儀言
の要點なり、青山伯ハ近く集めて敬するの人
等、近年集めし勤王の墨蹟早大に託するも
可なり、四月下旬五月初旬往訪して久しく語り
伯に会するも一興ハ未だ見ざる蒲原の新荘をも見
るも亦一興ハなるべしとせずと伯へハ余自ら拙著
一冊をも寄せさせい頼山陽の故あれと伯ハ一々読み
とを七精読し居らることと見えて其の書中のこと
まで談ったる話等ありしとぞ、いつぞや蓑印
の世話を托されし岩淵の別荘なる男へ入あつしと
見えてある伯の話なりとか、先んこる旅の伯の手元へ

の先迄ハ恐ふべき也伯ハ余に許すまで寄らしの二
子を以てす、例も也竟趣味の人なり
片山皆余に贈るに京都陶家花瓶の
此に係る馬麻の図ある黄茶に破ハ其の
を以てす、花ハ得嘉の花なれバ、馬麻
の図様あるが故ま黄り物まあらずと云
ハ左もあるべし、余に宝なる其の一瓢を
愛す、此の陶工ハ今古稀をこえ、戯集
の名人先年なる唯此人とのこすのみ、此
至珠とすべし

○杖木を製すること両洋なる工風ある杖のひねりや
屈曲ハ天日に曝らして其の結果として生ずるハ

を防ぐが為めに種々の杖をハギ合ハせて一種の杖
を作る、木種異なれバ繊維も同しからず、湿湿に
対する反撥力も異なるが故に之れをハギ
合ハすれバ自然互ひに牽制し合つてひねりを生ぜ
ざる理なり、いつぞや旅次此製杖所を見しことあり
今ハ其の何んの所なりしを思ひ出し得ず、此頃少け
バ大阪の華紫御造家濵田某一種の方法を
以つて製杖をなし至つて其大規模のものなりと
而して其杖を紅梅杖といふ、香葉のものなり、成るに
と桃林の働きを以てせるを為すへし其の立風
なるん、併し異種の杖をハギ合ハせ、或ハ同種の杖を
もち来る異なるものとハギ合ハせたる法ハ早く日

本の名工中ニあり、利器のこときハ既ニ用ひ居たり
といふ、余の所持する由蔵枝桐の研屏ハ其の
枝の厚サ三分位のものなるが、少しも曲ることもなかりき
もなし、ある日利の人之れを見て、ハキ会ハいかなることと云
へり、如何なる斯る蔭手の枝ならハ此法を用ひさえは
寒暑ニ侵りて狂ふべきハ必然なり、余此研屏を
長く蔵し其のことを心つかさりし（三月十日記）
○杉山寿栄男ハ近年原始文様上代文様を編し
実積ヲ昔公刊して世ニ行ふ、近頃亦アイヌの
文様資料を集めたる図版六十八枚を一帖として
刊行し余ニ一部を贈らる、近頃金田一京助と
いふ文学士斯道の専攻なる此の図録も其人の校

閲を経たるものなり、アイヌの文様ハ原始的文様の一なる
ゆえも、図版ニ示すものを見れバ決して幼稚のものと見る
能ハず、蓋し此の文様が文化の程度を測り得る
標的とすべからず、餘程進歩したることを示すを妨けず
研究家の説ニ據れバ、東西樺太千島サイベリヤ
皆同系ニ属すと思はるゝものゝうち巧拙あり文野の
差を下し得べしといふ、概しも此の種族の文様ハ
八井然たるシメトリーを見る、日本の紋のごとく、スポ
ンタ子アスにあらず、其の衣服の厚司なるものゝ文様
ハ右も皆しかれバ之れを表示し左右ニ文様分れたるを見す
シメトリーを見る、円形方形の盆中の彫り文
様ニ於ても亦其然るを見る、見るべし実ニ形

取らずどこまでも模様なり、花菓座に織りなす模
様も亦然り、彼等の彫刻に天品の特能あることの如
く、此模様範に於て殊に技巧を弄することを見る、
北方面に於ける彫刻又は普通アイヌ風の文様を
縦横に刻するの外、鳥や獣や魚や人や船の形を
写実に主体に彫りあるを見る、蓋しコレクシヨン
中の選品なるべし、彼等には装飾美の好尚これ
労を辞せざる性質ありと見へ、普通装飾を要せ
ざることなし細線を施ましあり、例へハ紡織の具
機の其外其の数の他の民族に於て技術装飾を
施くべきを例とするも彼等は細刻を施し居れり ファイ
ンアートハ彼等の先天的趣味なるべき歟　亜鉛

十二行

の者と同日に語るべきにあらざる也、飄然異つて所
懐を録すと云ふ

三月十日

△殊に驚くべきハ農具の鍬先に模様あり金属に
文様を印するハ開明の国に於ても容易の事と云ふ
亦無用のこととして斯る事に労せざるを常とす
るにこれまでも纏刻ありし想ふのみ○

○楠瀬日本画と活次一二観すべき談柄を得たり、九歳
の吉嗣拝山に筆に関係ある一事実がある、拝山は
右の手を何かの理ひ失つたので書道に左筆び
なることハ周知の事実であるが、拝山の筆ち
自分の右手の骨を筆管に作つて常に用ひられ

と云ふこれを右手で書くといふ心意気を寫し
たものであらうか奇な事実である、前に録した
余が弟某の語に挿入すべきである、高津里平
の語るまゝ望月圭助の家に西郷南洲の
四字の扁額があつてそれには天下無敵とあつ
て南洲揮毫中途と云はれてゐる此額
の来歴を少くとも聞甚だ興味がある、西郷
は小野川と云ふ角觝を贔屓にした、ある時
此角觝が全勝を得た時に特にこの額を書い
て賞した、小野川は之れを得て喜こび且つ西郷
の書いたこれを表装して家寶と頌していた
が、恐縮なことに表装に裂地とするため關係の

錦の引裂を頂戴したいと云はれたので、西郷は寧
ろ自ら座右の錦をメリメリと引裂いて與へた
それを周圍に用ひて扁額を作つたのが、後に望
月の手に入つた、私の見るまゝ惜しいことに錦地が
はぎ取られて今は金装表に改められてゐるとの、
但し錦の引裂地は保存されてあると云ふ（八、寧ろ
還元して改装する方がよろしいと思はる。望月
は廣島生身の職人である　　三月十日記
◎大隈会館に催した一人一代将軍家人物画展覧会
を観る。北条より将軍二家採道忠信所蔵
品も多く出陳されたが、おもしろく感じたのは採遊
花桃田柳宗華採遊肖像、これをよく生来

てゐれ探幽の肖像の世写しであるともいはれであらう、忠
信家蔵の尚信、安信の肖像もあつた、前者は歌川
後者は昌運の筆ぞに係る、探幽の印や絵筆や
絵具皿（五枚）が出てゐた、印は小帖に捺して六箱
庭に置きたいと思つた程で人に托した、蓋は皆で焼も
れた筆は無は瀬戸の産物であつた、探幽以下の印も
多く火災にかゝり焚殴のことであるが印面を待と
満足であるもの数ある以上あつた、忠信蔵品の内に
元信の墓碑の拓本があつた、永禄二年の刻字
がある、古文書が三通出てゐた、一通は貞信の遺言
状で古信に宛元和九年のもの、一通は栄秀の遺言
状も特に花押寛永六年のものである、要講一

巻、安信の遺書替物も書道要談もあつた、此等
のものが陳列の余裕がなかつたのが見られぬのであ
である、故人鄭宇が元信と題つゝ此尺牘もおもし
ろく感じた、書幅の陳列中才一に推すべきは続
川公爵家蔵元信の山水大幅三幅対であつた、例の
堅い筆であるが、めしく離れを見るとどことなく
和らう味もあつて漂渺の感に打たるゝを得ぬ品
位を勒つてゐることである、公爵家は外に
探幽の牛若丸が出てゐた、これも見事である、極細
彩の精細の筆を揮つたもので、探幽の妙技と
感ずるを禁じ得ぬ、福岡子爵家の古永徳筆
維摩の像は横物大幅であるが豪邁の筆

如何まし

びたる人を想ひしむる、蓋し徳川家の元信に次
くの逸品と見られ、大河内子爵の探幽寵
甫の屏風一双、同花英一蝶の琴棋書画
屏風一双も稀傑を壓する偉観であつた、
一蝶のは極彩色で画中の生活状態を描し
たるもので極度のものであるが晩年の作と稱し
筆致の異なるを覚へられ、作近衛公爵家の
常信の聖賢の三幅對は稀和の南陽の図を模
したもので筆力を認める、狩野家の刻中守景年
幅が少なかつたが、小品ながら珠と感じたのは、守景
の富士（井上辰九郎氏蔵）も其一であつた、これなど左の
◎自作の和歌があつた

一、同上　人物三幅對　松島鉦四郎氏藏
一、同上　中文珠　岡崎正也氏藏
一、同上　枯木五位鷺　荻生天泉氏藏
一、探幽、尙信、安信　左右山水合作　井上辰九郎氏藏
一、探信　瀧見観音　高田早苗氏藏
一、同　宗論 中壽老左右　同上
一、同　草花三幅對　狩野探道氏藏
一、常信　山水双幅　高田早苗氏藏
一、同上　賢聖の圖三幅對　近衛公爵家藏
一、同上　辨才天　同上

一、探定齊守行　人物　野中熊吉氏藏
一、一信　五百羅漢　增上寺藏
一、永悳　雛　狩野忠信氏藏
一、探原齊　西王母　狩野探道氏藏
一、芳崖　墨竹　高田早苗氏藏
一、同上　牧童　井上辰九郎氏藏
一、橋本雅邦　列子　高田早苗氏藏
一、同上　富士筑波双幅　同上
一、同上　人物の圖　黑須廣吉氏藏
一、同上　[illegible]　同上

狩野家歴代繪畫展覽會出品目錄

一、正信　出山釋迦　白石　村治氏藏
一、古法眼元信　山水三幅對　德川公爵家藏
一、同上　琴高仙人　三谷　勝澤氏藏
一、雅樂亮之信　鐘馗　岡崎　正也氏藏
一、松榮直信　維摩　同　上
一、同　花鳥　井上辰九郎氏藏
一、季賴　布袋双幅　同　上
一、永德　維摩　福岡子爵家藏
一、右京光信　枝栗　白石　村治氏藏
一、同上　宇治川　福岡子爵家藏
一、元昭　山水　井上辰九郎氏藏
一、九郎三郎　達摩　同　上
一、探幽　牛若丸　德川公爵家藏
一、同上　観音　高田　早苗氏藏
一、同上　孔子　大河内子爵家藏
一、同上　牡丹　高田　早苗氏藏
一、同上　布袋河渡り　同　上
一、同上　維摩　狩野　探令氏藏
一、同上　布袋と唐子　高田　早苗氏藏
一、同上　三幅對　奥山　紫明氏藏
一、同上　宇治川　高田　早苗氏藏
一、同上　富士に雁　同　上
一、同上　同上　井上辰九郎氏藏
一、同上　達摩　同　上
一、同上　六祖　荻生　天泉氏藏
一、尙信　中蓬莱　左右士農工商（五幅對）　大河内子爵家藏
一、同上　韃靼人狩　高田　早苗氏藏
一、同上　豐干禪師　井上辰九郎氏藏
一、同上　賈島推敲之圖　狩野　探道氏藏
一、同上　三幅對　池田　龍一氏藏
一、同上　樓閣山水　富田幸次郎氏藏
一、同上　鐘馗磨劔之圖　平井　賴吉氏藏
一、安信　龍虎之圖　三谷　勝澤氏藏
一、同上　卷物　同　上
一、同上　新田義貞　同　上
一、同上　龍頭観音　高田　早苗氏藏
一、同上　眞山水　狩野　探道氏藏
一、同上　福祿壽　同　上
一、同上　布袋　狩野　探令氏藏
一、同上　右、枯木に梟　左、竹に雀　狩野　探道氏藏
一、同上　人物三幅對　松島鉦四郎氏藏
一、同上　中文珠　岡崎　正也氏藏
一、同上　枯木五位鷺　荻生　天泉氏藏
一、探幽、尙信、安信　左右山水合作　井上辰九郎氏藏
一、探信　瀧見観音　高田　早苗氏藏
一、同　宗論　同　上
一、同　中壽老左右草花三幅對　狩野　探道氏藏
一、常信　山水双幅　高田　早苗氏藏
一、同上　賢聖の圖三幅對　近衛公爵家藏
一、同上　辨財天　同　上
一、同上　靈照女　狩野　探道氏藏
一、同上　禰衡圖　同　上
一、同上　虎溪三笑　同　上
一、同上　破墨山水　平井　賴吉氏藏
一、同上　瀟湘八景　久米　良作氏藏
一、同上　文珠　岡崎　正也氏藏
一、同上　朱買臣　荻生　天泉氏藏
一、同上　蓮に翡翠　同　上
一、周信　枯木に鳥　高田　早苗氏藏

一、山樂　牧童　小鳥　うめ氏藏
一、同上　岩上鷹　井上辰九郎氏藏
一、同上　山水　小野英二郎氏藏
一、山雪　梅に叭々鳥　高田　早苗氏藏
一、同上　梅に小鳥　同　上
一、同上　渡唐天神　井上辰九郎氏藏
一、同上　雪景山水　狩野　探道氏藏
一、永納　人丸　高田　早苗氏藏
一、同上　山水　小野　英二郎氏藏
一、同上　黒梅自畫贊　井上辰九郎氏藏
一、松本山雪　富士　同　上
一、海北友松　東坡騎驢　琴高乗鯉（双幅）　松島鉦四郎氏藏
一、海北友雪　實の秋　高田　早苗氏藏
一、興以　龍虎双幅　同　上
一、同上　黄初平　同　上
一、同上　三幅對　久米　良作氏藏
一、同上　布袋　井上辰九郎氏藏
一、興也　花鳥　同　上
一、竹翁　靈照女　高田　早苗氏藏
一、同上　同上　井上辰九郎氏藏
一、昌庵　花鳥（双幅）　岡崎　正也氏藏
一、卽譽宗信　白鷹捕鶴　織田子爵家藏
一、守景　道釋人物　高田　早苗氏藏
一、同上　花山僧正　同　上
一、同上　春駒　同　上
一、同上　普化禪師　同　上
一、同上　牡丹　井上辰九郎氏藏
一、同上　不二自畫贊　同　上
一、同上　四幅對　岡崎　正也氏藏
一、鶴澤探山　観音　高田　早苗氏藏
一、鶴澤探索　山水　井上辰九郎氏藏
一、鶴澤探春　勿來關　岡崎　正也氏藏
一、加藤遠澤　人物双幅　高田　早苗氏藏
一、同上　着色人物　井上辰九郎氏藏
一、女雪信　女三宮　高田　早苗氏藏
一、同上　漢高祖　脇村　正七氏藏
一、探元齊　琵琶行　高田　早苗氏藏
一、同上　山水　同　上
一、同上　三幅對　井上辰九郎氏藏
一、同上　自畫贊　同　上
一、探定齊守行　人物　野中　熊吉氏藏
一、一信　五百羅漢　增上　寺藏
一、永悳　雛　狩野　忠信氏藏
一、探原齊　西王母　狩野　探道氏藏
一、芳崖　墨竹　高田　早苗氏藏
一、同上　牧童　井上辰九郎氏藏
一、橋本雅邦　列子　高田　早苗氏藏
一、同上　富士筑波双幅　同　上
一、同上　人物の圖　黒須　廣吉氏藏
一、同上　涅槃　同　上
一、同上　林和靖　荻生　天泉氏藏
一、探令　樓閣山水　久米　良作氏藏
一、同上　探幽墓石
一、忠信　山水雙幅
一、探道　維摩
一、三谷勝澤　水墨山水
一、探道摸　芳崖筆惠比壽大黑
一、探幽　龍虎屏風一双　大河内子爵家藏
一、英一蝶　琴棋書畫屏風一双　同　上
一、探幽　山水卷物　同　上

幅が少なかつたが小品で殊に感じたのは守景の富士（井上辰九郎氏藏）も其一つであつた　これは左の自作の和歌があつた

十二行

一、右京光信　枝栗　白石　村治氏藏

一、同上　宇治川　福岡子爵家藏

一、元昭　山水　井上辰九郎氏藏

一、九郎三郎　達摩　同　上

一、探幽　牛若丸　徳川公爵家藏

一、同上　觀音　高田　早苗氏藏

一、同上　孔子　大河内子爵家藏

一、同上　牡丹　高田　早苗氏藏

一、同上　布袋河渡り　同　上

一、同上　維摩　狩野　探令氏藏

一、同上　布袋と唐子　高田　早苗氏藏

一、同上　三幅對　奥山　紫明氏藏

一、同上　宇治川　高田　早苗氏藏

一、同上　富士に雁　同　上

一、同上　同上　井上辰九郎氏藏

一、同上　達摩　同　上

一、同上　六祖　荻生　天泉氏藏

一、尚信　中蓬萊 左右士農工商(五幅對)　大河内子爵家藏

一、同上　韃靼人狩　高田　早苗氏藏

一、同上　豐干禪師　井上辰九郎氏藏

一、同上　賈島推敲之圖　狩野　探道氏藏

一、同上　三幅對　池田　龍一氏藏

一、同上　樓閣山水　富田幸次郎氏藏

一、安信　鐘馗磨劍之圖　平井　頼吉氏藏

一、同上　龍虎之圖　三谷　勝澤氏藏

一、同上　卷物　同　上

一、同上　新田義貞　同　上

一、同上　龍頭觀音　高田　早苗氏藏

一、同上　眞山水　狩野　探道氏藏

一、同上　福祿壽　同　上

一、同上　布袋　狩野　探令氏藏

一、同上　右、枯木に梟 左、竹に雀　狩野　探道氏藏

一、同上　人物三幅對　松島鉦四郎氏藏

一、同上　中文珠　岡崎　正也氏藏

一、同上　枯木五位鷺　荻生　天泉氏藏

一、探幽、尚信、安信　左右山水合作　井上辰九郎氏藏

一、探信　瀧見觀音　高田　早苗氏藏

一、同　宗論　同　上

一、同　中壽老左右草花三幅對　狩野　探道氏藏

一、常信　山水双幅　高田　早苗氏藏

一、同上　賢聖の圖三幅對　近衛公爵家藏

一、同上　辨財天　同　上

一、同上　靈照女　狩野　探道氏藏

一、同上　禰衡圖　同　上

一、同上　虎溪三笑　同　上

一、同上　破墨山水　平井　頼吉氏藏

一、同上　瀟湘八景　久米　良作氏藏

一、同上　文珠　岡崎　正也氏藏

一、同上　朱買臣　荻生　天泉氏藏

一、同上　蓮に翡翠　同　上

一、周信　枯木に鳥　高田　早苗氏藏

一、洞雲益信　葡萄　狩野　探令氏藏

一、同上　牡丹に獅子　三谷　勝澤氏藏

一、洞春美信　樓閣山水　井上辰九郎氏藏

一、永叔主信　東坡騎驢　富田幸次郎氏藏

一、榮川古信　白鳥　狩野　探道氏藏

一、榮川典信　文珠　井上辰九郎氏藏

一、同上　栗　狩野　探道氏藏

一、同上　武藏野の富士　樹下　信雄氏藏

一、伊川 晴川 合作　三幅對　同　上

一、同上　栗枝上園碁　高田　早苗氏藏

一、融川　月雪花(三幅對)　同　上

一、勝川　叭々鳥　同　上

一、同上　山水　小野　英二郎藏

一、同上　黒梅白畫賛　井上辰九郎氏藏

一、松本山雪　富士　同　上

一、海北友松　東坡騎驢 琴高乘鯉(双幅)　松島鉦四郎氏藏

一、海北友雪　寶の秋　高田　早苗氏藏

一、興以　龍虎双幅　同　上

一、同上　黄初平　同　上

一、同上　三幅對　久米　良作氏藏

一、同上　布袋　井上辰九郎氏藏

一、興也　花鳥　同　上

一、竹翁　靈照女　高田　早苗氏藏

一、同上　同上　井上辰九郎氏藏

一、昌奄　花鳥(双幅)　岡崎　正也氏藏

一、郎譽宗信　白鷹捕鶴　織田子爵家藏

一、守景　道釋人物　高田　早苗氏藏

一、同上　花山僧正　同　上

一、同上　春駒　同　上

一、同上　普化禪師　同　上

一、同上　牡丹　井上辰九郎氏藏

一、同上　不二自畫賛　同　上

一、同上　四幅對　岡崎　正也氏藏

一、鶴澤探山　觀音　高田　早苗氏藏

一、鶴澤探索　山水　井上辰九郎氏藏

一、鶴澤探春　勿來關　岡崎　正也氏藏

一、加藤遠澤　人物双幅　高田　早苗氏藏

一、同上　着色人物　井上辰九郎氏藏

一、女雪信　女三宮　高田　早苗氏藏

一、同上　漢高祖　脇村　正七氏藏

一、探元齊　琵琶行　高田　早苗氏藏

一、同上　山水　同　上

一、同上　三幅對　井上辰九郎氏藏

一、同上　自畫賛　同　上

一、探定齊守行　人物　野中　熊吉氏藏

一、一信　五百羅漢　增上　寺藏

一、永悳　雛　狩野　忠信氏藏

一、探原齊　西王母　狩野　探道氏藏

一、芳崖　墨竹　高田　早苗氏藏

一、同上　牧童　井上辰九郎氏藏

一、橋本雅邦　列子　高田　早苗氏藏

一、同上　富士筑波双幅　同　上

一、同上　人物の圖　黒須　廣吉氏藏

一、同上　涅槃　同　上

一、同上　林和靖　荻生　天泉氏藏

一、探令　樓閣山水　久米　良作氏藏

一、同上　探幽墓石

一、忠信　山水雙幅

一、探道　維摩

一、三谷勝澤　水黒山水

一、探道摸　芳崖筆惠比壽大黒

一、探幽　龍虎屏風一双　大河内子爵家藏

一、英一蝶　琴棋書畫屏風一双　同　上

一、探幽　山水卷物　同　上

一、探幽　臨畫山水卷物　井上辰九郎氏藏

一、安信　人物山水卷物其他　三谷　勝澤氏藏

一、桃田柳榮　探幽肖像　狩野　探道氏藏

一、融川　尚信肖像　狩野　忠信氏藏

一、昌運　安信肖像　同　上

一、明人鄭澤の狩野元信宛尺牘　同　上

一、探幽印章廿七個　狩野　探道氏藏

一、安信印章數個　狩野　忠信氏藏

一、探幽以下歴代印章數個　狩野　探道氏藏

一、探幽遺品繪具皿五枚 繪筆壹本

其他諸家出品數十種

何の芸事のあるをたとへんとするらしくれ
及ハ如何なる士のたとへなりけり
採画の私かなる筆意をかけと
セがまれて　守景

画ふしも此書画に趣を感じけれ同しく守景筆格高
の図（高田早苗説）これも言ふなる趣味あるものぞ
あつれ他ハ略す
（三月十四日記）

○古梅園墨譜正続二篇を久しぶり翻閲し
て見て今更の興を感じた、今まで気が附かなかつ
たが、多くの序跋の内に傳る柱伊藤東涯祇
園南海中井積善成島鳳卿池永道雲（篆
字）らしきもあつて当時の名流の書を多く収めて居る。
梁田蛻巌

墨範の下絵を書いたものもいろいろある、探幽乃法橋
陶宗東江鳥石[illegible]亭蕪村堂などが書や画を書き或ハ
其工匠で作つたものもいろいろある、古梅園の紫泥で
支那の墨工が先往の墨を翻刻したもの其の図を見ると
康熙乾隆の年號がある、形式ハ頗る多般であ
る中に拳甲墨といふものがあり甲由日の像であつて
多般の例とすることが出来よう、歴史的に古い墨
の式に倣つたものでハ二諦坊古翠玉墨これも古梅園が庶
まつ興福寺の二諦坊に持つたといふのを倣つたもの
前代墨ハ古今著聞集に後白河帝が熊野に幸し
たまへる時前代田司が献じたと云ふ那智ある墨で
ある、江州武佐墨といふハ古人禁橋を書くに尤もよ

用へられたのと云ふ墨である、或ハ利休の用墨を摸したる
松花堂の用墨を摸したのである、古金石を摸
したものは佛像石もあり多賀城の碑もある、
有名な俳句を録したもの或ハ下の墨もあり、南都の
八景を図したものもある、形の奇なるは實用
にならないものもある飾り墨と見るべきであら
う、古梅園二世が續墨譜の終りに石墨のことを
叙しておるのは今度始めて氣が附いた、紫墨
を知らさうし上代支那の漢瀬なる石墨を用ひた
とあるので、古梅園主人は日本にもあるべしと多年
各地に捜がして終に同じ奈良の春日山と越び學
雲を攀ち幽渓を渉り図らず無事に一拳石墨

十二行

拭墨法

に似たるものを得て試みるに麗なる墨汁濃くが如く
く出で、数百年し更なる原を以どり二石ばかり
険阻の道を蒲僑しより漢石の悪き墨なるものを
採り帰てこれを試記するがある、此墨譜を録し凡
て掘出しこれの此記するのである。（三月十五日記）
○キリシタン殉教の研究が漸く盛となりて来て、これ
に関係の図書も注意を惹く様になりこれ、何分
一時禁令が嚴であつたので日本には此部類の
書の保存されてゐるものが甚だ乏しい、然るに何
かある家ではお手もと集めたるを今も保存してゐる、
[redacted] 其れハ大略左の目録のことである、

聖教要理（どちりな・きりしたん）洋字活版本一冊
吉利支丹心得書　寫本二冊
吉利支丹十戒　卷子本一卷
羅甸文平假名書彌撒唱文及連禱　斷簡
吉利支丹古暦書　斷簡
吉利支丹用語略解　斷簡
立原翠軒自筆調査書　一冊
諸聖人御作業書抄及宗門諸抄　寫本一冊
佛書抄錄見本　寫本六葉
七科觀念書　一冊
オラショ雜纂　斷簡
諸聖人記念日表（暦書對照）折本一帖
西洋銅版畫帖　一帖
（德川圀順侯爵家藏）

今度大阪毎日新聞で切支丹叢書を印行を企てたにつき新村博士が以上の諸書を校勘したことがある、今参考のため此覚えを茲に収めおく

十二行

破提宇子古刊本　一冊　（京都帝國大學圖書館藏）
吉利支丹宗門雜抄　一冊　（東藤次郎氏藏）
ごちりな・きりしたん（聖教要理）一冊　（中谷源次郎氏藏）

〔**新村出博士略解**〕日本に殘存せるキリシタン古文獻の重要なるもの十數種を、各原本によつて複製し、名づけて吉利支丹叢書といふ。この外、明治以後海外から回收した洋活字本數部、翻刻本二三部を除くときは、發見せられた和刻本二部あるけれども、本邦に遺存する古寫本では、此叢書殆ど現存既知の重要なものを網羅したるに庶幾く、其の他の本に至つては他日及ぶべき限りの補脱を期せんとするものである。

原寫本は一二を除き、大抵皆書名を缺いてゐるから、今便宜上假に一應の名稱を附することゝした。他日精査考究の後題名を確定する時機がある

聖教要理（どちりな・きりしたん）洋字活版本一冊
吉利支丹心得書　寫本二冊
吉利支丹十戒　卷子本一卷
羅句文平假名書彌撒唱文及連禱　斷簡
吉利支丹古暦書　斷簡
吉利支丹用語略解　斷簡
立原翠軒自筆調査書　一冊
諸聖人御作業書抄及宗門諸抄　寫本一冊
佛書抄錄見本　寫本六葉
七科觀念書　一冊
オラショ雜纂　斷簡
諸聖人記念日表（暦書對照）折本一帖
西洋銅版畫帖　一帖
（德川圀順侯爵家藏）

べく從つて假設の書名は公敎會の新舊慣用語に據らなかつたものが多い。

水戸藩がキリシタン史料の蒐集保存、研究編纂等に力を盡したこと頗る大で、諸藩及び幕府にも殆ど比倫を絶せるほどであつて、而かもその由來するところ甚だ遠ほい。

現に東京小梅德川侯爵舊邸の一小函に藏せらるゝ吉利支丹の法器及圖書等の如きは、元和寛永時代の遺物で、吾人未だその來歴を詳かにしがたい憾みがあるけれども、旣に同藩に於て寶暦年間の調査と寛政年間藩儒立原翠軒の考査とを歷たものである。下つて明治大正年間に至つて内外敎學の士の觀察に上つたことがあつて、近年その聲價世上に喧傳せらるゝに至つたが、大正十二年九月の震災に方つて東京向島小梅の侯爵邸亦厄を免がるゝことが出來なかつたけれども、この小函を藏せし秘庫が百難を逃がれて今日に存するに至つたことは眞に天祐に歸すべきである。今侯家この無二の寶函を開いて秘籍の撮影を縱にされたことによつて、此等の吉利支丹史料十有餘點の弘く此種の研究に志す者、並に趣味を有する者に提供せらるゝことを得たのは學界の爲めに慶幸といはねばならぬ。

『聖教要理』書名『どちりな・きりしたん』は羅馬字綴日本文で、一六〇〇年（慶長五年）長崎？耶蘇會（ジエスヰート）學林の活字印行本で、サトウ氏が古く日本耶蘇會印行書志の補遺として日本亞細亞協會報告に全文を印行して、世に現はして以來最も有名な書であつて、類本は羅馬の文庫に平假名活字本二部と、北攝の中谷氏に同古寫本一部がある。今回はその原本のまゝを印影した。

聖教要理（どちりな・きりしたん）洋字活版本一冊
吉利支丹心得書　寫本二冊
吉利支丹十戒　卷子本一卷
羅甸文平假名書彌撒唱文及連禱　斷簡
吉利支丹古曆書　斷簡
吉利支丹用語略解　斷簡
立原翠軒自筆調査書　一冊

諸聖人御作業書抄及宗門諸抄　寫本一冊
佛書抄錄見本　寫本六葉
七科觀念書　一冊
オラシヨ雜纂　斷簡
諸聖人記念日表（曆書對照）折本一帖
西洋銅版畫帖　一帖
（德川圀順侯爵家藏）

『諸聖人御作業書抄及宗門諸抄』は元和四年（一六一八）南部壽庵云々の奥書がある約三十枚の一冊子で諸聖の御作業等をはじめ、宗門に關する抄錄本で、一六〇六年法王のインダルゼンスに關する記載も見える。

『吉利支丹心得書』二冊相連關するこ思はるゝ一書で、各三十六葉ある冊子であつて、美しい平假名で書かれてゐる。第二冊の末に寛永五年正月の年記がある。

『佛書抄錄見本』は西教の宣布に際して來朝した宣教師が、或は佛教の要旨を學び、或は還俗せる佛僧を登用し、或は佛教宣布の樣式を攝取したことは注目すべき事實であるが、こゝに彼師徒が佛書抄錄の標本二冊を得たことは誠に珍重すべく、各三葉を撮影して參考に供することゝした。

『吉利支丹十戒』は本邦の宗門關係の諸書にも見え、又コリヤドーの懺悔錄て有名な西教の十戒を錄したものであるけれども、卷子本に仕立てゝ莊嚴な書き樣をなし、且つ卷首に銅版畫三圖を貼付した體裁は最も注意すべきものである。

『七科觀念書』七曜日にわたる七科の觀念の要諦を述べた十三枚の小冊子である。

『羅甸文平假名書彌撒唱文及連禱』羅甸文を平假名で綴り而も假名に特別な寫音符を用ゐたるなど、帝室博物館所藏の小本を想起せしむる。連禱の文句は東藤次郎氏の吉利支丹宗門雜抄等こ對照すべきものである。

『おらしよ雜纂』　アベマリヤ其の他十餘種のオラシヨの要文を集めたものであつて、聖教日課等こ對照すべきものである。

『吉利支丹古曆書』キリシタン信徒間に用ゐられた太陽曆本であつて聖者

聖教要理（どちりな・きりしたん）洋字活版本一冊
吉利支丹心得書　寫本二冊
吉利支丹十戒　卷子本一卷
羅甸文平假名書彌撒唱文及連禱　斷簡
吉利支丹古暦書　斷簡
吉利支丹用語略解　斷簡
立原翠軒自筆調査書　一冊
諸聖人御作業書抄及宗門諸抄　寫本一冊
佛書抄錄見本　寫本六葉
七科觀念書　一冊
オラショ雜纂　斷簡
諸聖人記念日表（暦書對照）折本一帖
西洋銅版畫帖　一帖
（德川圀順侯爵家藏）

記念日を註してゐる。この種のもの長崎浦川氏の公にした外海信徒の日繰及び東京林若吉氏が越前福井で得た類本などが現存してゐる外、殆ど皆散佚した。

『諸聖人記念日表』　前記古暦書と對照すべきもので、七曜に配して基督及諸聖人の記念日を錄したものである。折本の形にした平假名寫本で間々片假名を交へる。

『吉利支丹用語略解』　は宗門に關する種々の件名用語を略解した片假名書きの字引樣の書物の斷片である。

『西洋銅版畫帖』　主としてマリヤ一代記を描ける小銅版四十三圖の外、別に同種の銅版若干葉を貼附した洋裝アルバム樣の一帖であつて、當代舶載品の標本となすべく、亦珍重するに足るものである。タイトルペイヂの如き一面には西紀一五七三年（天正元年）羅馬云々の文字見え、貼附した版畫にも一五五五年頃刻したものがあり、その外に木板一箇も添ふてゐる。

『立原翠軒自筆調査書』　前記諸書及その他の法器類を寛政十二年藩儒立原翠軒（甚五郎）の圖錄記載及び稽査せるものにかゝり、仙臺藩醫大槻磐水の『金城秘韞』（文化年間編）と共に珍重すべきものである。水戸彰考舘にはこの原本から抄寫した『切支丹法器』と題する寫本があるが誤寫を交へてゐる。

今回の叢書には前記銅版畫帖の外には專ら文獻のみを採つて、法器法服等の物品は除くこととしたのであるが、立原氏の調査書の圖錄によつて、これらの貴重な物品の一般を窺ふことが出來るのは幸である。

『破提宇子古刊本』　維新の際徹定上人の飜刻した木活字本の流布は尙少し

聖教要理(どちりな・きりしたん)洋字活版本一冊
吉利支丹心得書　寫本二冊
吉利支丹十戒　卷子本一卷
雜句文平假名書彌撒唱文及連禱　斷簡
吉利支丹古曆書　斷簡
吉利支丹用語略解　斷簡
立原翠軒自筆調査書　一冊
諸聖人御作業書抄及宗門諸抄　寫本一冊
佛書抄錄見本　寫本六葉
七科觀念書　一冊
オラショ雜纂　斷簡
諸聖人記念日表(曆書對照)折本一帖
西洋銅版畵帖　一帖
(德川圀順侯爵家藏)

とはせぬけれども、德川初期の古刊本は現存既知のもの僅々三部を出でぬ稀覯の書に屬する。此の著者ハビアンは我國の史籍にも散見し、天正慶長間の敎會に對して編著出版及び宣敎上の業績頗る多ほかつた本邦著名の敎士であつたが、慶長中期轉宗して元和六年に此の書を著はしたのであつた。出版の年代は詳でないが、編述の年代を甚しく下らぬ時期のものであることは疑ひない。

『吉利丹宗門雜抄』　京都帝國大學文學部考古學硏究報告第七冊に於て、原書の本文若干葉を添へて詳かに紹介せられたものであつて、亦德川初期の抄本である。宗門の信條儀式唱句等を抄錄した手帳で、內容は、水戶德川家所藏の諸本と對照考究すべきもの甚だ多ほい。本書は次に詳說するところの中谷氏藏本の『どちりな・きりしたん』と共に大阪府下三島郡に屬する北攝

十二行

十二行

龍村平藏君は予の知友中の一偉人である。凡そ人は德行政化善政などを以て世を濟ふの外己れの業とする事について、前人の糟粕に甘んぜず他人の籬下に倚らずに、古來未だ曾て有らざりし著述とか創作とか、發明とか、乃至はその成蹟とかゞ、文化の進運又は社會の公益に貢獻する所あつてこそ、世に生れて來たかひもあり、不朽の名をも蹟をも垂るゝに足り、始めて偉人と稱することができる。龍村君の織物に於けるが如きは即ちこれである。織物はもと〳〵經緯の組織と絲彩の錯綜とで、平面の上に畫圖意匠を現す藝術で、これに肉を附け凹凸を出すことは、昔しから無いことであつたが、龍村君は嶄新な工夫を凝らして、織面に起伏を作る發明を成し遂げ、又他の異藝術の作品に特有なる趣致を織物の上に現さうとして、高蒔繪や螺鈿や堆朱、木彫、油繪などの味ひを巧みに擬ひ得たばかりでなく、組織の發明は一にして定らず、その圖案意匠は廣く古美術の妙趣を温ねてその創作に新生面を開き、更に普く古來の織物の遺品を研究してこれを摸製し、人文の遺蹟の一部分の朽損泯滅を救ふてその絕ゆるを繼ぎ、唐宋の錦綾及び謂はゆる名物ぎれは君の手に由りて再生して、その壽世を永からしめることを得るに至つた。かくの如きは實に織物史上に特筆せざるべからざる事實で、即ち君の斯業に於ける才力の偉なるを證する所以である。佛蘭西のサロンが君を准會員に推選したのも、畢竟本國の日本よりもより能く君の藝術上の價値を認めたからに過ぎない。君の作品の最も多い部分が婦人の帶であるのは、精巧を極めた織物に相當の價を吝まぬものが外に少い現代の我が國に於ける需要の關係から因より自然の數で、帶だからとて賤視りだからとて、君の製作の妙味を鑒賞するに少しも妨碍はない。隋唐錦綾の零片が今現に百千金の至寶となつてゐるのも、皆これ當年の衣帶に用ゐられたものに外ならぬ。されば龍村君の織製の帶も、現在に於いて婦人の裝飾を美ならしめた餘りが、他年の寶物となつて一層珍重されるに違ひあるまい。名工は隔世にして出で、佳作は不斷に在るものでないから龍村君がその得意の製品の一部を提示せられるこの度の展覽を機會として、これを世に闡めて置く

大正十五年三月十六日

一、國寶日暮時繪文錦

藤堂侯名匠龍川氏を激勵し畢生の力作せしめんと保護いたらざるなし數歲營營

文庫硯筥なれり其精緻金銀を延べいたかねをちりこみ寶玉は珊瑚瑠璃碼碯を彫

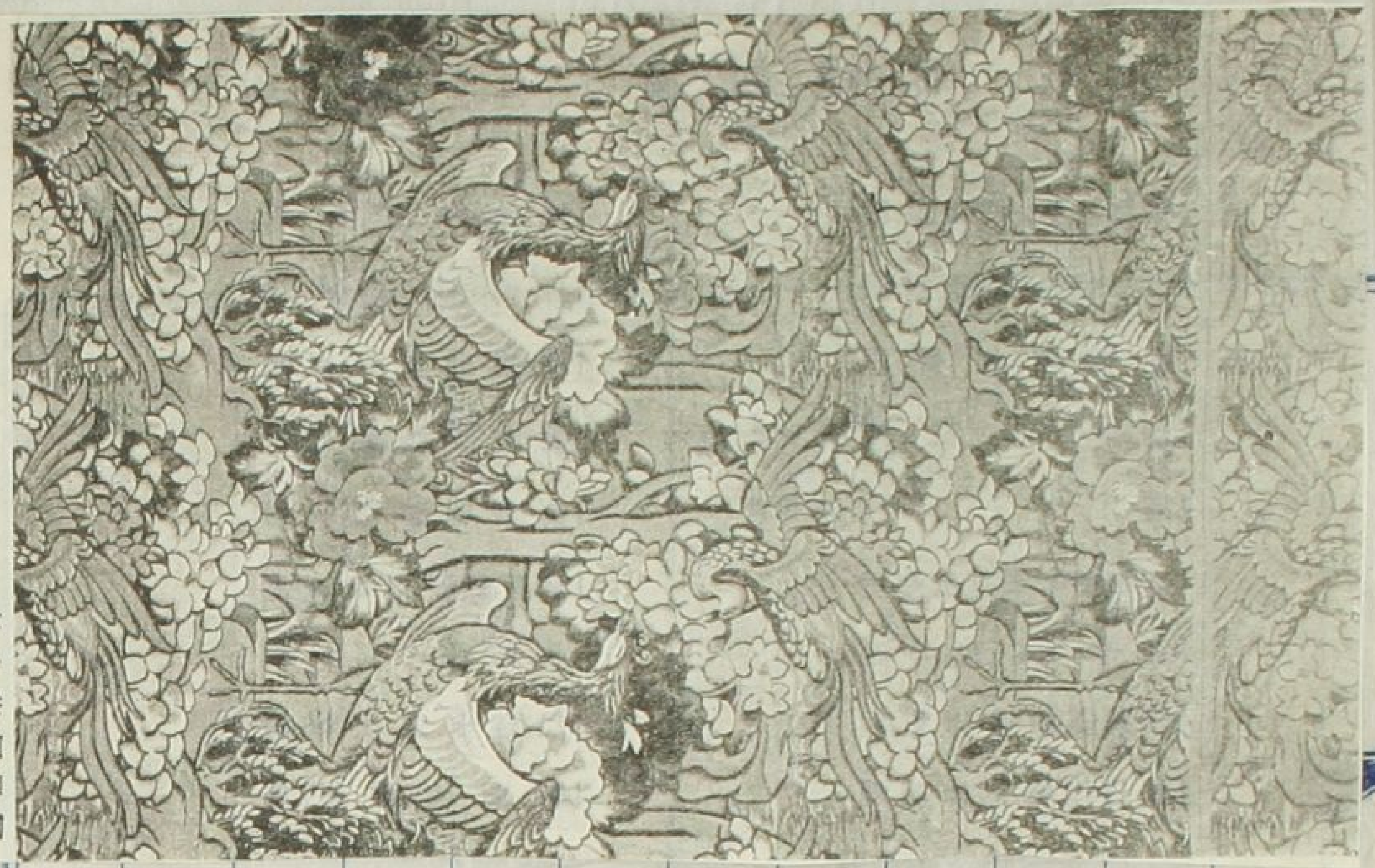
め眞に古今を空らしく森嚴雄麗微妙を極め稀るもの蓋蔵三寶せざるなし遂に將

軍家光公の台覽に入り召して坐右におき愛翫之を久らしてかへさるるに及び

日を暮して見れども飽かず

と親書を賜ふ斯名の所以也氏藤堂家の恩に浴しこれを臨摹せられ文庫硯筥中の好圖を自選作圖隱密しその高蒔繪と珠玉の美を髣髴たらしめんが爲特に凸凹の新組織を考案せられ以て我日暮をして織錦たらしむるを得たり。

尽くす高島屋呉服店で龍村平藏出品作品を
陳列して装飾を低々としてゐる。左に収めたのは
が列品の一斑である。此人の作品は前年も見たがいづ
れも頗る手の込んだ高雅の織物ばかりである。織物界
まで恐らく空前の名匠であらう
○二十四日　放送局から頼まれて余の談話を吹き込（[illegible]）
本日は来ん共一日夜で漸やく仕上つて来たので
話題を定めねばならぬ。前日一旦大隈侯伝記
の消息を語るとしてみようかとも思つたが、どうも之れ
宣伝するハチト時機が早いい、先に聴衆一般
に興味を引くところの話から[illegible]
目に述べることとし、以て談話題を選ぶの[illegible]


靈鳳栖苑文錦

一、靈鳳栖苑文錦
聖樹仙草の下鳳凰遊んで瑞祥を唱ひ鸞來りて隠相
に舞ふこの古趣をして新機あらしめんとしやま
と錦の組織を用ひゴブラン織の色調を採り蒼古
と鮮新の美を併せて得んとせり

國寶日暮詩繪文錦

はさゝを得ぬ、聴者の中までも帰へも多くあるわけ
れから帰へ（二日詰のある、おそらくみのあることのを避）は
論ぜらるゝ、前のを拾ても弘法大師の名高き寺
とかいふから寺のことなど思ひ到り、縁切寺と似て
ゐる鎌倉松岡の東慶寺のことなども論じて見よう
かと、そのたまゝく閑を得たので多少案じて見
た、日本までの宗教の信念から仏縁を絶つれ流し
は数々あつて論ずるらしく無い、例の董藤道
心の流しや西行がどこかれある出家つれ流すが
人口に膾炙するものが少くある、逃げて来世
寺のは今まで其の意図が異つてゐる、殺て宗教と関
係がなく唯れ身の損しゐがなく身を一時寄

せを救をもとめるといふのである。ここに宗教離れ
かして俗ではあるが更に却つて興味もある、
全体男女の間に一旦結んだ縁を絶つことは人倫
の重大事とされて昔しは今も難いこととなつてゐ
る。然し絶縁しなければ女が苛虐に苦し
まんで内の不幸（言ふ可らざる不幸）に陥る場合に
は何か救済の道が無ければならぬ、仏法が衆庶済
度の一端としても、寺域に駈込むものを保護するとい
ふのも無理からぬことである、東慶寺や満徳寺が古く
から一種の特権を有つたのもつまりは女人済度から発
したものであらう、外国にも尼寺や修道院に女人を
収容してゐるけれども皆尼として取扱つてゐる、唐の

高宗の皇后となつた則天武皇が太宗の喪であつた時
僧院に送られたとかいふ処すら之れを尼として扱つた時もある。
出された。本の縁切寺は最初は俗として之れを保護し
頭髪を剃らせ自らこれの珍らしいと云ふべきで、
寺に身を寄せると云ふは堅苦しいが、一面には極
めてロマンテツクの処もあるから、コンナ淡話が聴
者に偶々興味があるかも知れん、いつぞや世界を書いた
それは大正十三年二月の雑記に収めてある、さきた
ゐ此寺の今昔女人の生活状態の文を掲する。川
柳はいろいろ穿つたことを云ふてゐるが、淡話の放送
に川柳を引くは面倒あるから、川柳の意を示の
も淡話体にしてみると凡左の如くである。

十二行

縁切寺東慶寺に於ける当時の駈込人の生
活はどんなであつたらう、寺の住職は歴代
尼僧であるこんな人々異性を知らぬ処女で
あつた。お婆さんでもチヨイナンドはここまで純であ
であつたが、所謂駈込人は皆な処女ではない
階段はいろいろであつたであらうが、皆な男女
の間に葛藤を生じ、それが為めに駈込んだので
である。亦略
の間が和さない為めもあつたらう、舅姑に
イヂメラれて逃げこんだのもあらう、既に後に
は間男をして身の置き所がない為めに駈
込んだのもあらう、十二日しろコンナ連中が家

人もごろくしも三年の間修ぎやう二年とつとめ

れども一所に起臥したのである、三年たてば

バ離縁状かと知れぬ、自分のカラダでハなくて、こ

こに入る目的の仏門に入るのでハない、志かし従つて

従つて経を読まねばならぬ、鐘も叩かねばならぬ、

不慣の経を覚えてドンナに滑稽であつ

たらう、唄を歌つたり三味線を弾いた

在俗の時にハ親の人が、其のお経にどんなに

あつたらう、無論紅白粉をつけるも禁せ

られおはぐろをつけることも出来なかつた、

ヒカスことハ一切無論出来なかつたも

青其のである、おすけれ魚肉を

喰ふことが出来ぬ、男の顔を見ることが出来

ぬ、ましてや三年も経ち親の喪に服した後

其の身は謹身の形であつたがまだ是へ、志かし

枕を並べて寝ると、互ひに語る者もなく悪癖ば

かり、亭主の悪口でもいはうものなら、舅姑のザンゾウ、

どれもこれも同じ様な話で何んでも同感であ

つたらう、いやになるほど

返した悪性もあつたらう、姦夫の悪を語つてマセツ

二十で新造入るものハベソく、永く居るものハ二十

自然と威張つて新入をイジメることもあつた

であらう、いつ仲人や親族に画り過ハぬ

限らぬのから一歩もつかぬ様に出すこと

小生来そのつもりであらう、松ヶ岡まで無駄花が（川柳のやうにだらく）
咲いて、美しくてロマンテックの話しがあつた
ら相違ない、それを筆にしたらどんなにかあつたら、
面白い小説であらう、何故此の如き生活を
小説の題材に取らないのであらうか
補 もとく佛門に入らうと云ふ念は其から懺悔を
し皆語つたりとすることも其のつもりで、或人住居
へたとへのか、寺で其れを公にしておくとすれば
可なり居たであつたらうて、而して衣食の費用を
銘々拂つたことだと考へてみる、鎌倉と云ふ所
ことを見做つた茶屋が古くあつて、其處が
いろくのお數が残つておると考へてみる。新

十二行

歎録者仲人なら小寺へ、行つたら面会が出来ない
ので此の墓參をしようて消息を通したらと思

小丸山、

○昨夜傳通院前の偕樂園に新潟會時代の舊友
相會す、十名計来會、例のごとく学生時代の話しが
湧き、與を感ずる者し。互ひに舊交を思ひ出して其
の消息を語るやうにまた今居る人と云ふ者より又
生存の平等と栄枯盛衰を思へば先
から夢の如し、酒酣にして一友當時書生間に行はれたる
英洋の俗歌を唄ひ出し一坐を絶倒せしむ、其唄に
云く

Crow yaho gaho on the roof of

Wuchiya, Oyama Flourishing
Said Chy.

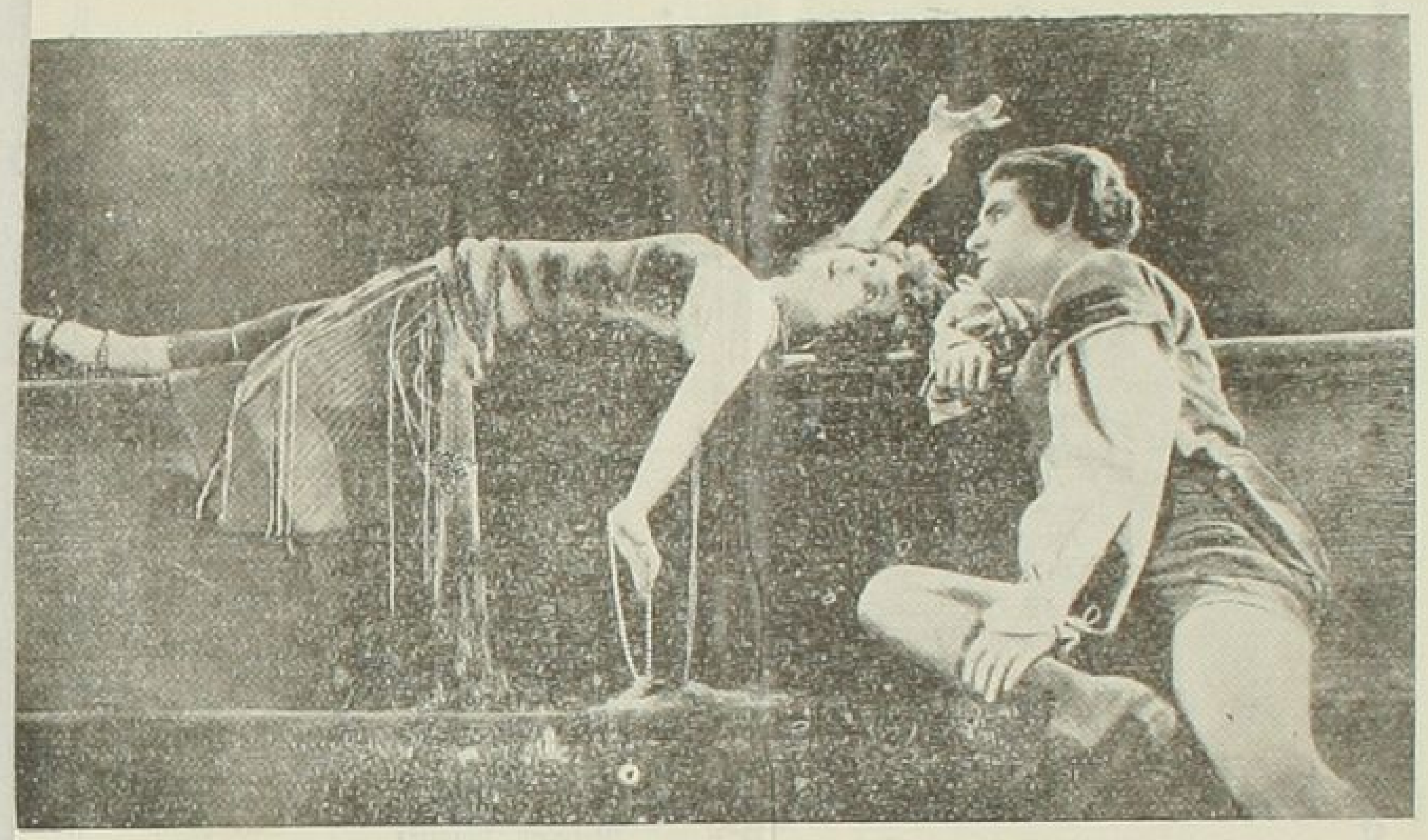
当時新内の妓楼濃厚な描写ありと云ふ所、此の
唄は妓の哀業を訴へしものなり、是をおあある
といふを嘆く、ことといふを フロリウレンジ、大井ツドバ、クラ
イと譯しある流石に当時英訳の来るを告白
するものとて一笑を禁じ得さる也

三月十七日記

○またき侍らせ末の娘の迎ひに往かせて新宿の武蔵
野館の映画を見る、四五年来門に近寄らず
我映画を見るを例とす。感服すべからざる少
からされど近年の日本劇をも見る事にも興味あ
りと言ふべき點なきもの見る映画海賊ペートロを

出来も備へて見るに出来のものあるしも、ピートロとファ
イナを演じたる男女両優の技へ確かに藝術的價
値ありと思はれたる。いつも感ずることなきも、獨逸
出来の映画の内容を劇化の国民性にあふれ来
西式の如きは浅薄のものにあらず。此映画へ別して
獨逸気質を充分に発揮したる。劇の統向
と劇に關する批評は前年の見た所に得たる
印刷物をここに収めおく。内田某の批評は頗
る同感する点もあれど言へんとする事を言へり映
画をも見て翌日の記とす

三月十八日



獨逸ウーファ映畫

人情活劇 **海賊ピエトロ** 全八卷

ウィルヘルム・ヘーゲラー氏原作
アルトゥール・ロビソン氏脚色ヽに監督
ルドルフ・マイヤー氏撮影

ピエトロ・ヴニーニ……パウル・リヒター氏
ファーナ……アウド・エゲーデ・ニッセン孃
サルヴトーレ……ルドルフ・クラインロッゲ氏
ピエトロの父……フリッツ・リヒャルト氏
ピエトロの母……フリーダ・リヒャルト夫人
ピエトロの弟……ワルター・フォン・アルウォルデン氏
弟の婚約者……リリアン・スティーヴンス孃
ソラーロ……ハンス・シュトゥルム氏
マルチェルラ……リディヤ・ポテヒーナ孃

梗槪――若者ピエトロは燃える樣な功名心と鐵の樣な筋肉とを持つて、南伊太利の農家に生れた。彼の村から程遠からぬ海上には一つの古城を根據として海賊の一團が勢力を張つて、地中海に君臨してゐた。毎日濱邊に出て熱い潮に足を洗はせ乍ら空想するのが好きだつたピエトロは、何時の間にか豪壯な海賊の生活に抑へ切れぬ好奇心と憧れとを覺える樣になつた。

所がある日偶然の機會から海賊の副頭目のサルヴトーレの生命を救ふたのが緣となり、日頃の念願通り海賊團の一員となり、海上を我物顏に橫行濶歩して冒險と戰慄とを求めて廻る身分となつた。サルヴトーレは深くピエトロを德として、二人の間には永久に還るまじき友情が契られた、もしも、ファーナといふ若い乙女の影が二人の間に射して來なかつたならば――。

說明 石野馬城 藤井紫水 德川夢聲 伴奏曲目選定 長谷川秋甫

『海賊ピエトロ』

内田岐三雄

獨逸ウファ映畫「海賊ピエトロ」は近來の獨逸物では群を拔いて優れた映畫です。私としては、フリッツ・ランクの「ニイベルンゲン譚」以來の好きな獨逸映畫なのです。

實際、此の映畫を試寫の時に見た際など、次から次へとグン〲惹きつけられたものです。そして、アルトウウル・ロビゾンの監督としての優れた手腕に全く感服すると同時に、パウル・リヒテルの浪漫的英雄としての雄々しいピエトロの演出に、ルドルフ・クライン・ロッゲの強い男が唯一つの戀の爲めかくの弱さに人眼には意氣地なく見えるけれども、それも人間としての生れながらの弱さなる事を如實に現はし得たサルヴアトオレの性格描寫に、アウド・エゲエテ・ニッセンの强い浪漫的な勇士に憧がれる娘、そして、男の弱点と己れの美しさを誠に知り得た女、ファナの魅力に、正に惹きつけられたものです。そして更に、舞台裝置者としてのアルピン・グラウの才をも併せて認めたのでした。

「海賊ピエトロ」は中世の華かな時代を背景にして居ます。所は地中海の沿岸、花の香が海の香と入りみだれてゐる、その色彩豊に明るく美しい舞台が大部分を占めてゐます。

そしてそれが時には、天空一碧、波のうねり高い大洋の正眞中へと舞台を移して行き雄叫びの聲を轟かして船と船との、舷側が近づくと時に、船から船へと、入り混れて海賊共が修羅の巷をも現出させてゐます。ピエトロと、サルヴアトオレとの奇しき交りから、サルヴアトオレが西班牙より齎らした天下の至寶、美女ファナの姿を現はす事によつて、ピエトロとサルヴアトオレがファナをめぐつて描き出す愛と憎しみ、友情と嫉妬、力と涙、刄と刄との戀と劍との物語が、美しく色濃く、鋭く描き出されるのです。

本當に、最後のクライマックスともいふ可き、ピエトロとサルヴアトオレとの決鬪の遑りの力の這入つた描寫など、見てゐても力が入つて、手に汗を握りました。米國物等で盛んに見る拳鬪等も隨分激しいとは思ひますが、到底この映畫に於ける程の力の入つたものは見られません。實際、試寫の時に「いいぞ、そこだ」と唸つた人もあつたのです。廣告ぢやありません。その決鬪の前の、ピエトロとサルヴアトオレを前にして、ファナが妖豔な人を魅する踊りをしてピエトロに勇氣を與へサルヴアトオレの嫉妬を煽る邊など、今だに忘れられません。

實際、今度ほどアウト・エゲエテ・ニッセンの魅力が完全に發輝せられた映畫はないだらうと思ひます。最初、私がニッセンの映畫を見た時には、何等異つた感じをも受けませんでした。そして平凡な俳優だと思つてゐたのですが、「ドクトル・マブウゼ」を見た時に、今迄よりは遥かに優れてゐるニッセンを見出して驚きました。それ以來「ファントム」、「蠱惑の街」などとニッセンは段々その輝きを增して來ました。そして一番最近に紹介される此の「海賊ピエトロ」がその一番優れた魅力に富んだニッセンなのです。

パウル・リヒテル、ルドルフ・クライン・ロッゲ、それからアウト・エゲエテ・ニッセンと此の三人の顔合せは、ランクの「ドクトル・マブウゼ」以來のものです。

十二行

切支丹物の興味

(一)

市島春城

最近、切支丹宗門迫害當時のことを書いた出版物がぼつぼつ出て來る。私はもとよりキリスト教に信仰を持つてゐるわけでもなく、あながち趣味があるといふのでもないけれども、殉教のことに關した近來の書物は何となく興味を以て出る度びに讀んでゐる。が、今こゝで、これに對する深い考證といふことは不可能なことなので只だいさゝか所感を述べるだけに止めて置く。

私が興味を感じたといふのは切支丹の書物は永らく國禁であつて、殆ど許されなかつた。從つて日本ではこの方面のものは眞暗らであつて、わづかに西洋で發刊されたものをみてその幾分を知るといふ位なものであつた。然し西洋の書物でさへ近來(維新前)まで日本でみることは出來なかつた。それがだんだん自由になつて近年は研究も始まつてゐる爲めにその書物も公に出版されて來る。それを讀んでみると全く明るみへ出るやうで一種興味を感ずる。

この部類の書物は今は少くない。姉崎博士の著したものもあるし、和田博士のモンタヌースの日本紀行を飜譯したものもあり、その他松崎氏の著はした切支丹殉教記、尚はそのほか江戸の切支丹屋敷のことを書いたもの等其他の色色な出版によつていくらかこの方面のことが知れて來る。

この切支丹といふのはカソリック教を云ふのであつて、これが豐太閤の慶長頃から徳川氏に及んで殆ど百年ばかりの間に日本に擴がり、それを禁壓するために非常な力を入れた。でその禁壓の爲めに非常な慘酷なる刑が行はれ、敎徒が敎のために死し又外國から來た宣敎師も同じく敎のためにたふされた。その悲慘なる歴史は殆ど世界に例がないと云はれてゐるほどそれほど慘酷なものである。一面からみれば宗敎の信仰に對して殘酷な刑を科したと云ふは甚だ野蠻國の仕打のやうで文明國に對しては國辱とも云ひ得るが、然し一面に於てその難に遭つた宣敎師や又は敎徒は如何なるトールナメントに對しても依然として恐れず、如何なる誘惑があつてもそれに從はずして悠々として死におもむいたその事蹟を見ると實に外國に對しても誇るべきものがある。だから一方の國辱は又一方の譽を以て償ひ得るとも云へるのである。

抑も慶長二年に秀吉が異敎徒二十六人を刑に處してから、その刑場にあてた長崎の立山はその後幾回となく同じ刑場に用ひられて、その山は殉敎者の鮮血を以てそゝがれてゐる。その關係からこの山を聖山といふに至つた。(續)

切支丹物の興味

(二)

市島春城

この二十六人を刑するに如何に慘酷の法を以てしたかといふ如き詳しいことはこゝにはぶくが、殆ど世界に例のない位なものである。それが爲めに事實がローマ法王に報告さるゝと、二十六人の靈を聖列に擧げて、爾來神の如くそれを拜むことになり、維新前文久年間にローマ法王が世界の代表者を集めて大祭典を擧げた時も、此二十六人の殉教者を祀つて、これを世界に向つて手本とするに至つた位なものである。この廿六人を刑したのがそもそも始まりで、それから後徳川氏に移つてもしばしばくりかへされた。が然し壯烈な殉教者の死樣といふものは如何にも立派なものであつて、決して前の二十六人に讓るものではなかつた。

この時分は云ふ迄もなく戰國の時代で、いはゆる武人の魂は頗る盛んで、死を恐れない精神といふものは武人の間に滿されてゐたのであるが、この殉教徒の死に臨んで恐れない氣はくは、其武人をさへ後へにどうじやくたらしむる。且又非常なトールナメントに對して堪へ切れず敎をすてたものもあつたに相違ない。然し如何に割引して考へても、この殉教者の壯烈なる事蹟の多いことは、おほふべからざるものがある。又だんだん年を追ふに從つて、その異教徒に對する迫害は益々峻烈を加へ、ごう問の法も頗るか酷を極めたにかゝはらず、殉教者の信念は益々固くしてそれを禁ずることが出來なかつたことを思ふと、如何にも當時のカソリック教の人心に與へた感化力の大なるものあるを思はねはならぬ。でこれは詰り當時人心が粗ぼくであつて今日のやうな浮薄の氣がなく、又外來の宣教師も犧牲の精神が盛んであつたので、その爲めに深く人心を收攬した故であらう。この當時全國に散在したカソリック教徒の數は三十萬と傳へられてゐる。それも今日は宗教の自由がある時であるけれども、わづかに十萬を數ふるに過ぎない。詰りカソリック教が衰へたことは人間の理性の發展で、その理性が邪魔する結果でもあらう。然し抑へれば揚り、壓すれば激するのが物の數である。昔の爲政家が一意鎭壓に力を致し、云ふに忍びざる慘酷を極めたるがかへつて反動を生じ、これが爲めに信徒を多くし、その信念を一層強固にした傾がある。其當時の殉教者は常に「我々のそゝぐところの血は後繼者を培養する肥料だ」と叫んだといふが、これはぶ言でない。

當時の爲政家はたしかに壓鎭の方策を誤つたものである。凡そ何事でも一概に禁壓すると反動が起つて、かへつてその効を奏しないものである。宗教に對しての禁壓などは殊にその一例と見るべきものであらう。

この異教徒の爲めに色々な慘刑が工夫された。その慘酷は人間の能力のほとんど極點に及んだ工夫である。もと殺すのが主であるのでなく苦しめるのが主であつた。苦しめて改宗を促し又他の異教徒をおびやかす爲めであつた。であるからなるべく死に致らしめず長らく苦しめることに苦心した。たからはりつけに繋いで燒くにあたつても一時に燒けることを防いだ。例へは薪に水を注いだりして苦しむ時間を長くすることに努めた。かうしてありとあらゆるトールナメントが試みられ、つひに長崎に沸湯を吐き出す溫泉山のあるのを幸ひ、それに異教徒を伴うて熱湯を浴びせかけるともやつた。此等悲慘な苦しめ方の數々は色々な書物に書かれてゐる。それはあまりに悲慘なことが多いから一々云ふことを見合せるが、最も甚だしい苦しめ方は人情に背いたことを敢てしたのである。例へは夫婦を捕へ來たつて夫の目前に婦人を裸體にして大勢の面前に辱しめ、或は甚だしきに至つては裸體の女を非人に與へて勝手に辱しめを受けさせたり、頑是ない子供を母の目前にか責を加へて母に改宗を促したりするなどは實に人情をはづれた苦しめ方と云はねばならぬ。現に實例させられてゐる一例を擧げると、三人の小さな兄弟を兩親の前で首を斬つた。首を斬る役人がさすがに刄を加へかねて腕がひるんだ爲めに三人とも首を斬りそこなつて、やむを得ず二度も三度も刄をふるつたといふなど偶然ながら非常に苦しみを加へたものである。この役人も三人の子供を殺しては堪らなくなつて悶絶して倒れたと云はれてゐる。何んといふ悲慘のことだつたらう。

一三月十九日事に依りて敬業神田の出店より借りて
て過日借りた左の二書を購ひ収めたり、

一　竹堂画譜　二冊

岸竹堂の画譜は世に多く画譜
海布すれとも此画譜稀覯に属
す、竹堂の連山の義子なり名は八
寧字は清夫といふ、四條派にて北の
画譜例のことく[illegible]の跋
あり山陽竹山洪園梅亭六如大
典春梅鷹等其尤なるものな
り初摺本とす

切支丹物の興味

(三)

市島春城

かうした苛責に遭つても、婦人もその意志を變ぜず、小兒までも從容死に就いたといふことは殆ど信じ難いことであるが、然しそれが事實である。

畢竟カソリックの教は自己否定といふのに歸着するから、肉を亡すことなどは何んでもないことである。彼等は死を光榮とした。死は天國に至り神の膝下に至るものとしてこれを喜んだ。從つて處刑に洩れたものは、その殉教者を羨んで自から進んで強ひて刑に服したものもあつた位である。かやうな靈的心理に對しては肉體的のトールナメントは何の効力もない筈である。さすがにこの異教徒を問責する衝にあたつた名奉行は、ごうもこれは考へ物だといふことに氣がついて、この苛責の法を改めた。そしてなるたけ軟かい法に改めて道理を以て說き伏せることにした。そのことの詳しいことは姉崎博士の近著に載つてゐるからここには云はない。

凡そ自己否定ほど恐るべき力を現はすものはない。決死といふことなども自己の否定に外ならぬ。かるが故に古來宗教戰ほど猛烈なものはない。島原の亂の如き、最初は百姓一きのやうに輕んぜられたが、決死の亂徒は官兵に對して飽くまで屈せず、遂に有名な松平伊豆守信綱は十二萬の兵をひきゐて島原城を圍むに至つた。この大げさな攻擊も實は甚だ力がなくて一擧に攻め落すことが出來ず、やむなく兵糧攻をやつたのみではない外國船(オランダ)の砲力を借り城の背後から攻擊せしめた。かやうに外國の力を借りたといふとは大分物議を釀し城內の亂徒にも笑はれ、さすがの伊豆守も恥ぢてその應援を斷つたと云はれてゐる。島原の亂は平定したが、この爲めに官軍の死傷はおびたゞしい數にのぼつた。これなどは宗教戰の小規模なものであるけれども、如何にもその力の大なるものであつて侮ることの出來ないものであることが知れるであらう。世界の色々な宗教戰が、いつも猛烈であるといふことは、それにあづかるものが決死であるからである。むしろ死を尊ぶといふ戰ほど猛烈なものはない。

私はこれらの事蹟を讀んで益々このやうな事蹟の研究を經て明かならんことを望む。もしカソリック教が、慶長以來迫害を受けずして、だんだん盛んになつたならば日本はどんなになつたか。これが爲めに日本の文化はどんなに進んだであらうといふやうな方面までも遡つて研究を要することである。

今日浮薄の人心に於てかやうな強烈なる殉教の歷史といふものは、今の世に對しても一つの清涼劑であると思ふ。繰りかへすが自分はあながちクリスト教を奉ずるものでもなく、その教に對しては全く門外漢であるが、然し今日の如く殊に色々の思想が錯そうし勝手我まゝなることの盛んな時代においてはかやうな方面へよろしく目を注ぐ必要があらうと思ふ。(完)

十二行

一 齋考節録　言　廿冊

此書文政十二年竹尾次春の撰ニ
係り徳川氏の薨卒を攷証する
こと尤も詳かなりし信ずべし所謂墳
墓の事にも及ぶ

此日東京堂の神代種亮氏も新刊本廿書生氣鋭なへ
を寄せ来る。此書は金等帝大在学中時のことを
坪内逍遥の戯作しけるを聴き人々珍らしがり
こと寄す。此書は活版となり發刊して、作者逍遥に聞き
入れて詳悉して此書出しけるに思ふべき多く
逍遥の中にあり、兼ねて余の知る所を採録しあり
三人の經緯を詳にせる帝大在学中の事情を述べし

喫飯を禁せらるゝことあるべし いつぞや同窓会をひら
きとある折政事的人の世代つき目し井伊直弼と
書生氣鋭なるも公務探索を演じしめられ候処
ニ先般を終りしとし其命と木稿路ならずして
もあるべし もう命の狂狷の原書を余が中より拔
しあり、其もいずれと共に此学中に収めあり
目前に残しし縁切寺なる事附加を要すべきことがある
離縁を伝ふと恰も今の結婚とも極めて交哉である。今
日比谷の大神宮を結婚式を挙ぐるとし、其を神聖
なりともあるべき旨の出来事への所として在るが某寺は拾すも
もとの交者の目出度からぬ而してる非聖の動力の世ある
る点に於て同じい、尚は東慶寺も徳川期の有名なる寺

するもまた寺役場も出来まして一種勅願所の役もつと
めて或る意味に於ける公証役所の性質をも帯びたし、
此寺を離れてから何等の紛議も生ずると証拠の根拠は
此寺にありとし、勿論相互にも此寺を徴することも
もあったし、此寺等役場等又其土地の名主等の如き
関係者の代人となることもあり、又必要あれば認したる
其いるべく公証の場合の主人がつとめることもあるなお
あるいは之に関する文書も存して居る。夫人が約満ちて
訴人などは来れば数ある時節には来て此寺に来
して保証人の様のことも必要であった。然れども又味方なる
の主人が寺を出た以上の出来ないことに就ては寺に迷惑を
かけずに責任を負ふとしたものである。随分余程中

で婦人に害を加へ好武い強奪等をしたことがあれば
それぞれ、此寺は離縁につき著称の要請しまた此
の勅願役所と名づくべき寺役所で在る換へれば形跡も
ええる、離縁裁判所げることもある。此等のことを表
換へれば裁判所を捨てる今の裁判所や区役所の如きに
ある代書所の如き役目をつとめた。勿論関係者もくは
此裁判所によることを得るのであったかどうかは
その収入もあったらうと思はれる。
此寺は北条時宗の未亡人住してより縁切のこと初まり
又第五世用堂和尚は後醍醐帝の息女で此
の代から三ヶ年在寺を廿四ヶ月に改めた。此
寺を縁切寺と称したことのあるのは寛永十七年

会津藩主加藤明成が此寺に駈込んでゐる。同藩士の堀主水の一家を暴力を以て奪つた。之の為め加藤家は四十二萬石を没収されて改易となつた、此時の住職は天秀尼公でこの方は秀頼の娘で養母の天樹院に訴へた、三代将軍は天樹院の弟であるから、会津に対し峻嚴の處置をとつたのである

○放送すべき余の講話中更らに補足して大阪の
役に関する處を縁切の役として見れば、大略左の如
くである

三月廿一日稿

日本に二ツとない縁切寺一ツは鎌倉の東慶
寺一ツは羣馬縣の満徳寺が共に徳川家
の女流と縁因がある。豊臣家とも亦因縁があ
つて、秀頼の未亡人と其娘とを其の二寺の
中興の祖としてゐる。秀頼の妻は二代将軍
の娘であるから家康の孫であり、其の娘とは
家康の曽孫にあたる。こんなのが寺に入れて寺
入りをしたといふも寺と云ふ所がある故、秀頼
の妻は大阪落城の砌り城から脱け出したのは
である。秀頼が死んだ以上は事実上縁が切
れたやうなもので、どこへ再縁しても差支ないや
うなもの、世間体さうはゆかず、徳川家と因
縁のある満徳寺へ入れて尼生活をやらせた
其娘も豊臣氏の種であるから、やはり家
からして、幼少から東慶寺に入れたのであらう。
いづれ裡面に事情もあつたであらうが、実の縁切
寺の住職となるべき因縁があると云へる。なぜ
ならば大阪の役は実は縁切の軍であつた。豊
臣徳川を結びつける為めの。徳川家から

娘を秀頼にやり政略結婚をしたのであるが、
両家の間柄が破れてあの戦が起つて豊臣
は亡びた、即ち此役は絶縁の戦である、秀頼
の妻は良人と運命を共にせず駈出したので
ある、云はゞ縁切寺に駈込む型をやつたも
同前である、それが縁切を寺法とする満徳
寺に身を寄せることゝなつたのもあはれなる
と云へるであらう、又其娘が鎌倉の東慶
寺に納まつたのも同じ因縁である、
それは先に角仕合を得たにて、此二個寺
である、斯る徳川家の運技を得た為めに追
々廃れつゝあつた寺法を立て直すことが出来

た、徳川幕府では二寺の寺法を出格に持続
すべく裏書をしたのである、当時はまさしく寺
は権威があつて、何人も犯すことが出来なかつ
た、秀頼の娘は第二十代の東慶寺の住職
で天秀尼と云つたが、其会津の藩主加藤
明成が其の家老堀主水の妻が東慶寺
に身を隠しておるのを武力を以つて奪ひ
去つたことがあつて、天秀尼は其母なる天樹
院に之れを訴へたので、当時は三代将軍の
時代で、将軍は天樹院の弟である関係も
あつて、此訴に対し幕府は会津に峻厳な
處置を下した、即ち四十二萬石の封を削り、

寺に入らせたのであると云ふ説もあるが、ハツキリ別り兼ねる。何れにしても離縁の形式を寺で踏ませければ再縁が出来なかつたと見へる、去れバ天樹院などの婦人（ひも[illegible]）の駈込と其の状情を同ふしてゐる。兎に角縁切問題から見ると大阪の役が縁切の戦であり、其の揚句二個の縁切寺が出来るまで到つたことも考へますとおもしろい歴史であると謂はざるを得ぬ

備考

満徳寺ハ建久三年徳川氏の祖新田義季の女を以て開基とす

東慶寺の本堂ハ今横濱原の三溪

改易を行つた、此改易に就ては他なる傳もあつたかも知れんが、寺の権威も非常であつたことがわかる。家康と云ふ武力を以つて縁を切り武力を以つて其孫娘を大坂城から奪ひ去つたことを考へると、會津侯の仕打と似たやうなもので誰れが鳥の雌雄を知らんやであるが、そこが絶是離別で、絶ずいふ事は叶はぬ。寺法を犯したと云はれて見れバ、会津侯も泣寝する外は無かつたのである。秀頼の未亡人ハ寺生活をやつて後まどうしたかといふと、本多家に嫁した。乃ち再縁の前提として且らく身を危させつした譯である。或は替玉をつかつて本人は

園内に移されてある
縁切寺の特権ハ広無辺の特権と同し
く幕府か其筋に困しる事情も亦同
じ

○ラジオの放送局のどこにあるかすら知らざりし余ハ廿
一日午後七時廿五分芝にて臨時演説を試みることゝ
なる局の自動車に迎へられて始めて此局に到る局
ハ愛宕山上にありいつしか山上に登る道も出来
て自動車ハ坂路を馳せて局の玄関に着す
此放送局ハ世界第一と称する程設備のよいもの
なるものと云へど、他のものを見しことなければ

果して然るや否やわからず判断に由なし案内
さるゝまゝ各室を巡覧したれバ、いろいろ行き届き
ある機械ありて吾等の如きにハ分らず、放送器のある室ハ大小三
室あり、一人放送する所の小室ハ八畳程の広さなり、奏
楽の室ハ之に二倍し四畳を容るゝ程あり、吹奏
ハ此室にてやるものなり、広さ大なるもの三倍する程
どのものもこれハ西洋音楽を奏する時など
に用ゆるらし、室の大小に拘らず、マイクロホーン
ハ一個にて、ラッパ形ひとつ円形の枠の内
部に金属製の網を張りたるもの、そのまゝ
機械をつなぐ、各室を一巡し地下室の機械をも
見る、手続を取る人ハ案内の多く各室にある

十二行

人数を合しなば二十人もあらん歟、建物ハ前面
半円形なり、庭ハ完全ならず然れども南
庭には先んじて二人の演説者あり一人ハ婦人
すこぶる熱時体態なりと説す、此人ハ江見氏なり
他の一人ハ沢波瓊なりて此人にハ交りなければ
東洋ハ其の話説ハ明晰雄論ニ関することなし
し　此二人の演説の後翻日新聞の二三人も
放送し余の演説時間となり、放送室に導
かれたり、室ハ遠く記者一人あるのみ、其機の脚ハ
ハ原稿を載せる台の設けあり、椅子も置
かれありたれども、記者して放送器に話しとなり
ラッパに口を寄せて吹込むなり進むことなきなり

原稿にてハ一時間位までハ時を費して可なりとの約
束なりしに、其ことを事務員に通しあらざりし
と見へて三四十分にして時間到るの注意を受
け一応話説をとゞめたれども結末をつけるまでの為
十分を要したるが故、更らに続けて四十五分の
時を延ばしたれど、まんうたれ杵屋六左衛
門父子を別室にまちてあり　迷惑を感じたる
ならん　話説終ると新聞一二新聞社より
余に電話かゝりし、お話しがおもしろい原稿があるな
ら相備しなしと、眠ハ今を受く、流石に文郷音
ハ早いものであると一笑しれ

○今日散策中得る所の図書一二を録す

一　経典数名考　三冊

此書文政十年信濃山田文静撰也
所文郎の書に著つるゝ数名の事を正
しとるもの二冊、末に一巻書目全書の
数部を附す、今稀観の書也、本
草部類に之れを（書名）可也

一　駿府志略　一冊

明家用九の撰ニ係る漢文にて経問あ
九要を得たり、文政十二年版也

十二行

駿府俗方を以て印行す、巻尾に
林山御用駿府江川町採選亭織
屋十兵衛俗家版とあり、珍書也

一　伊勢の物語識題　初　七巻　今二冊

此書寛文十二年の俗家版也、其序
世迄の無く刻しあるハ珍也情
らくハ末巻（第五）と第十の落丁あ
り、補写なれとも猶古めかし、書
奥書あるハ珍らし

一　伽耶山海印寺古籍　一冊

海印寺ハ朝鮮の名刹を記する

古刹也此者大梵字韓除れ寺跡を
叙し花径のこと支那跡のことに及ぶ
明代の撰文を主とし古く同流の叙
あり、近ころ校訂のことありし事跡
とすべし　　　三月廿二日記

○春陽堂主人編纂の信教を受け河竹祠主に執
筆せしめつゝある明治初頭の世相」の材料漸やく纏ま
りつゝあれども、政治経済両面割合におもしろき材料を
缺くうつらし、此頃まめしく取捕べきものを得る予定あつ
此の如し、ここに河竹に明治余の論流を蒐
しめ於、其の項左の如し

一 明治初頭の新聞紙

一 新都府土地の二束三文
一 大官ゝ賜邸のこと　大隈侯の梁山泊
一 珍臣其堂のこと　守旧派旗幟としき
一 御巡幸に就ての福地桜痴の長篇の歌
一 明治初頭の官吏の俸米
一 散髪令　略服脱刀勝手礼服の節
一 佩刀のこと
一 木戸大隈後藤伊藤　散髪して京
洋服着て初めて試乗のこと
一 陛下洋服（西曆）式臨御のこと
一 明治四年陛下開成学校へ臨幸　雅
楽を奏しそのこと

放送記

縁切寺東慶寺【上】

史話『尼寺の話』

—〔午後七時二十五分〕—

市島謙吉

私は先年暫らく鎌倉に居つた事がある。その時分に彼方此方を經廻つて古い寺などを訪ね歩いて、ひどく興味を感じたのは、東慶寺といふ寺である。此寺は圓覺寺の近くにあつて非常に頽廢して見る影もなくなつて居たが、併しこの寺の歴史を調べてみると極めて興味を感ずる來歴がある。これは普通縁切寺と言はれてゐる。昔、女が此處へ驅け込むと、その寺に保護されて三ケ年たてば自然に縁が切れるといふのが寺の法になつてゐる。斯樣な事がいつから始まつたかと云へば極めて古い事であつて今を去る六百年前、鎌倉で北條家が大に勢力を振つてゐた時までさかのぼる

北條時宗の未亡

人が此の寺に入つて女人を濟度する爲に女が一家の間に風波を起して夫と別れたいといふ關係を生じたものが、この寺に入れば、それを保護して、三年たてば如何に夫がかれこれ云はうとも、親族がかれこれ故障を申立てゝも離縁にする。斯ういふ寺の法を定めたのである。これが抑々東慶寺の一つの特徴であつて、他に餘り例のない事である。自分がこの寺に興味を感じたのも此の點である。全體離縁といふ事は非常に重い事であるので今日と雖も離縁といふものは頗る民法上六ケ敷い事にしてある

昔と雖も決して

是が輕々しく出來なかつたものである。昔は女の權利といふものは殆んど認められない時代であつて夫ばかりが妻を離縁する權利を持つて居たので、女から離縁を求めても、それは多くの場合、許されなかつたのである。斯樣な片手落ちの女人の甚だ不利益であつた時に於て女に對し濟度の道を佛法の方から工夫したといふのも決して偶然ではない。でこの寺に就ては種々なる變遷がある。前に言ふが如く北條時代から斯樣な事が行はれ初めたのであるが、それが德川氏に至り

更に裏書をせら

れて、その一種の寺法を維持する事になつた動機といふものは、秀頼の娘がこの寺の住職となつたといふ事から一層この寺の法といふものが維持さるゝ事になつた。といふのは秀頼の娘は二代將軍の娘が秀頼に嫁して、その腹に出來た子供である、それは大阪の後陣に秀頼はほろびてその子供は殘つたが扨てこれをどうしやうもない。當時は斯樣な場合にやり場のない女子はこれを佛門に入れるより外はなかつたといふ事から東慶寺に入つて住職となつたのである。これは東慶寺の第二十代の住職で天秀尼と云はれた。何と云つても德川將軍の流れであることだから、そのいふ事は何でも行はれたわけである今日でも日比谷に大神宮で結婚式を擧げるのがある

神前に縁を結ぶ

といふ事で、それが神聖にされて違背する事が出來んといふがためになつてゐる。東慶寺といふものは、丁度これの逆で、これが離婚所である。これは神ではなく、佛の力によつて離婚と云ふものを有效に認めしむる場所となつたのである。初めの中は、只驅け込めばそこで保護される、別に尼になるにも及ばず、お經もよむにも及ばず、只有髪そのまゝでそこに二ケ年辛抱さへすればそれで良かつたのであるが、德川期に至つて多分德川家の中頃からであらうが、段々弊が生じて來た。

夫婦喧嘩をして

驅け込む中にもその原因は餘り純なものでなく、隨分いかがはしい原因で驅け込む者も起り、甚だしきに至つては他人と姦通して家には居りかねて身を隱すなどといふ事も追々に行はれて幕府も頗る困つた。そこで後にはこの東慶寺に寺役場といふものを置いたり、又色々の制度を定めて離縁状をもつて來るものでなければ入れないといふ樣な事も起つた。併しこれはおかしな事であつて、離縁状が貰へる位なら驅け込む必要はない。即ち離縁状を貰ふ方便としてこゝへ驅け込むのであるから。併し取締上、幕府は今の離縁状を必要とした。それから追々にそこに住まふものは、そこに居る間に限つて矢張り尼にする事なり、段々昔の法が崩れてきた（未完）

—放送筆記—

縁切寺東慶寺【中】

史話『尼寺の話』　市島謙吉

東慶寺に附屬してゐる德川幕府の設けた寺役場といふものは一種の勸解調停の役をもつとめた。それから又或意味に於ては公證役場の樣な性質をも帶びてゐた。婦人がこの寺を離れてから尚ほ紛議が起るとその證據は東慶寺にあると斯う云つたものである。でそう云ふ意味は無論その女に就ての證書がその寺に納まつてゐるのだから、それが物を云つたのである。そこで寺役場がいよいよその女を戻す時になると必ずそれに就て證人が入用であつた。その證人といふものには其處の土地の名主、又はその附近にある宿屋の主人がその證人となつたものである。この寺の附近には今日はないが昔は公認の宿屋といふものが一二軒あつてその

女の親族其他の關係者は宿屋を賴

つて行つたものである。その宿屋の主人が親族に代り寺へも出入して親族に代つて種々の手續きもしたのである。丁度現今區役所の前に代書人があるといふ樣に、この宿屋の主人がそれ等の事をつとめ便利を計り愈々女が戻る時になると證人となつて書附に判も捺して家に歸る迄の間に何事か面倒が起ればその責任は宿屋の主人が引受けるといふ樣になつてゐたのである。この宿屋並びに、今の役場といふ樣な所は隨分こまかな所まで立入つた、例へば嫁の荷物、それは

離縁に就て取戻しを要する場合は

矢張その役場の力で荷物の引取りなどを取扱つてもらつた離縁裁判所といふ形も自ら備へてゐたとも思はれるさてこの駈け込んだ女人といふものが、三ケ年若しくは二十四ケ月の間どんな生活をしたものであらうか、それを考へて見ると多少の興味がある、前にもいふ通り此寺の住職は或取りのけはあるが多くは處女である。これは勿論尼僧であつて、いくらお婆さんであつてもそれはオールドミスである。處が駈け込み人といふのは悉くこれは處女でない。その階級は種々であつたであらうが皆男女の間に葛藤を生じ

夫婦喧嘩の揚句 驅け込んだもので

ある、或は夫婦喧嘩でなく後には間男などをして身のおき所がない者も駈込んで期間が滿つれば（二十四ケ月）その間男と夫婦になるなどといふ頗る良からぬ者が入り込んだ。そんな有樣で澤山の女がごろごろ起臥してゐたわけである二十四ケ月たゝなければ離縁状が

十二行

○ラジオ新聞に三日續きで余が放送談を載せてゐる　自分の實際の談話とは異つてゐるけれども紀念にこゝに切ぬきを收めておく

三月廿三日

○露西亜の國情に就て視察して帰へつた人の話を甚だしく少ないが、視察者の立場から其説が一区々である、國が其の通り廣く、政治の主も方が未だ未定であるから、見方によつては視察者の見方も無理はない、唯自ら識者の運輸や農村田帝権の政治を倒へつた話しと二時計り比べて見れ、それによると、日本の舊道者が見てゐるのとは全く異つてゐる、革命後まづ秩序も綱の如くないであらうと思はれる外モスコーでもレニングラードでも外見は立派になつてゐる、街路でも電車でも音楽場活動写真なども盛んで、到る處日本などの及ぶ所でないと云はれてゐる。社会組織は勿論一変して

とれない。即ち自分の身體でない駈け込んだ目的は敢て佛門に入らうといふわけではないから身を謹んで懺悔をするとか立派な修業をするとかいふのではない。併し作ら寺のおきてに從つてお經もよま

なければならないし鐘も叩かなければならないのでその不馴れな讀經をしひられてどんなに滑稽であつたらう。中には左褄を取つた者もあつたであらう。その三味線を持つた手で鐘を打つたであらう

縁切寺

史話「尼寺の話」

—放送—

勿論此寺では紅おしろいお歯ぐろを禁ぜられ精進潔齋で男禁制であつたから男ひでりであつた即ち二ケ年間は厳正に親の喪に服した樣なものであつたが各自が枕を並べて寝ると互に語る所は愚痴か亭主の悪口、舅姑の讒訴、どれもこれも同じ樣な話でいづれも同感であつたらうが、中には亡夫との縁

を語つて混ぜかへした魔性もあつたらう。期が満ちて、出て行く者はニコ／＼で、新に入る者はベソをかいてゐた。媒介者や親族に逢ふといけないので

一歩も門外へ出る事は出來なかつ

たが宿屋などの手引で親族からの手紙を受け取る事は出來た、彼等の飲食は、寺での支給でなく各自が辨じたらしい、駈込み女の中にはロマンスが多いので昔から川柳の材料になつてゐる縁切寺に關する川柳は頗る多いがこれを芝居にしたり、或は小説に書かれてゐないのは寧ろ奇とせざるを得ない。縁切寺は東慶寺が最も聞えて居るのは江戸を距ること十三里といふ近い鎌倉にあつたからで此ほかに

群馬縣新田郡の足利から近い所に

滿徳寺といふ寺がある。これは徳川家に因縁の深い寺で女人が駈けこめば保護される事は東慶寺と同

—雑記—

東慶寺【下】

市島謙吉

じである。そして家康の時に寺のおきてが確實に裏書された、それは秀頼の妻がこの寺の住職になつた事があるからである、この方は江戸に近くもない爲めに川柳にも讀まれてゐない、茲に不思議なのは二つの縁切寺が秀頼の妻子に關係ある事である、即ち

一方は母親が入り一方の東慶寺に

はその娘が入つて、その母子が、家康の孫と曾孫に當つてゐる關係からして非常に權威を振つたといふ事は頗る注意すべき事實であるこの秀頼の妻女は後に天樹院といはれた人である。寛永十七年、即

ち秀頼の娘がこの住職であつた時、會津の藩主加藤明成がその寺

を蹂躙して暴力を以て、自らの藩の家老（堀主水）の妻を奪つた事がある。それは寺法に叛くといふのでその住職が天樹院に訴へた結果會津の藩主は四十二萬石を棒にふつた天樹院は時の將軍（三代將軍）の姉に當る人であるから會津に對して斯くの如き峻嚴な處置を取るに至つたのである。

労農が本位でプロレタリヤが全盛でブルジユア悉く屏息の態である、働くこともなく金を遊ばせて働かぬものからは税を取る、貴族の大なる土地や家屋は取り上げられ、其の邸宅は分割されて階級の収入を標準として家賃を取つて貸しつけてゐる、坪数も限られてゐる、プロレタリヤに對する社会保険と云ふものも畢竟労農の利福を図る為めに出来てゐる、男女の同権も認められ、労農に對し教育が施され、監獄すらも旧時代と全然面目を改め、犯罪を其人の罪でなく社会の罪だとの解釈を取つてゐる、しかし国家の犯人に對しては餘程嚴酷である、プロレタリヤに對しては何れ

も便利寛大で貴族やブルジユアには苛酷である、一時労農も怠惰に流れ此結果産業は頗る衰へしが、統計すると遂に復興してゐる、政府も産業奨励の為めに少からぬ費用を投じてゐる、遠からず国営事業は個人に復するのであらう、即ち個人も成就すべき傾向も見えてゐる、共産主義も理論理想であつて行はれて見ると国家社会主義が行はれ、それも推し通して行くのであらう、感心するのは此の新政を施し、それを遂行する主脳たる人物の人格が純で、知識に勝つてゐることである、彼等は今尚自ら奉ずること薄く真面目に労農の利福を図るに汲々としてゐる、元来露国は其

雄崇拝の国であるが、レニンの崇拝されてゐることは
非常のものである。亜米利加は個人資本主義で世界を
雄飛するならば露国は国家資本主義で
他日世界の覇権を握るべきものが見える。今の露
新政体は言論の自由は束縛され文書印刷物の検閲
がやかましく集会も寡かに選挙の公平を得て
をらぬ。新政体を維持する権略すらも甚しきを
得ない事情があるからである。此の政体が進々
落つき労農に教育が普及したらば、露西亜も偏
り難い独裁とうるさいものであらう、今日は叛乱を
いとくおそれてゐるから、政府は盛んにスパイを用
ひてゐる。随て之れを用ゐることが頻繁であることに

又して日本は如何にも露西亜人が真ずるところは悪気
者がつき纏ひ彼等に悪感情を抱かしむるも日本
人の露西亜にあることあるもスパイを免かす時はいてをる
日の来るのが、日本のことく露西亜ひそかに感情を
害することが多い。日本も何とかやり方を改めなければ
ば将来両国上困るのであらう。露西亜は革
命後殆んど多くの年月を経ていけないいろいろ荒か
い経験を甞めてゐる。或時までは六十億までも
不換紙幣を発行するなりし、革命の一大原
因もこれにあつたと云はれてゐる。一時は貨幣を廃
して物々交換の制を行つた、それもうまく行はれず、行
詰つてレニンが新経済策を出し貨幣制度を

十二行

復活しれ、コンナことで一ト通りならぬ苦労をしての今
日であるから、露国を遠くから見て漫りに揣摩して
利慾去くあの考口で持てるものかなど執拗人
の評しもあるのそ評潤の見込を免かれぬ（三月
廿四日記）

○日本の租借地となつてゐる満洲ニ醤油の大必要通
物を達てなどうかと云ふものがある成るほど豆の大
産地であるから一ツの思ひつきである、今の豆ハ
原料ニの丈供さんもあるが、武許の将醤油の原
料と供する方が豆ハ働く譯でもあり、政府が醤
油の蘇生を専賣する策を取れバ満洲ハ共、
の発着通不こ通事中する

十二行

○日本ニ忘きりの露国の赤化宣傳ニ畏怖しておる
が支那ハ殆りこれを畏怖しておらぬ、支那の古哲
の由り来る所以ハ露西亜びやつてゐる掠奪理論
を習へ比ものがいくらもある老莊墨翟の説ハ支
那人の頭ニ深く這つてゐて、掠めんとしも掠きこと
が出来ぬ、頭の底ニ此思想があるから、日本人のや
うに恐れぬ、それの為びなく支那人ハまるく捨例
びあるのだくて利ーー害を考へることが恰
例びある、それハいくら赤化運動があつても利
ハ之れを取り不利ハ之れを取らぬ、赤化のためニ金
を散するものがあれバ金丈ハ頂戴して、あと
ハ野となれ山となれ、○これから昼花をせぬ、目をこ

れ支那の國民性がある、

○支那ハ今でも中華と自尊してゐる其の土壌の大を以つて比較すれバ欧羅巴全部を一國としてゐるやうなものである。そこで支那人の言ふことをきくと西の紛々たる情景を見て不統一だといふけれども欧羅巴ハどうである、其の民族の区々であることハ欧洲の如くである 欧洲ハ其の如く國を細かく持てゐても、互ひに争ふて時に戦争が起るではないか、何んぞひとり支那を咎めんやと云ふ流石に支那ハ大国だけれ其の量見が[illegible]広い、

○支那ハ民本主義の國柄であることハ争ハれぬ事

十二行

制の治であつた時でも民本主義からの習慣ハ牢として抜く可らざるものがある、為政家もウツカリ之れに觸れると失敗を免かれぬのである、張之洞ハあれほど人望を博した政治家であつたのに、天津で租税を定めるに当り 總しめ其他の商人の代表者と一言相談をせず定めた為め 其令が何んとしても行われず、流石の張之洞も兜を脱いで降参し、辛うして其令を行ふことが出来た、当時の友人に張も弱ろいたと云ふことである

○此世界ハ海と空氣と陸とで出来てゐる、此の三ツを支配するものハ世界を支配するものである、此の三ツを征服するものが世界を征服するものであるならバ

するのハ、今日の處てハ空を征服するものハ飛行機での
船で、水を征服するものハ軍艦や船舶で、陸を
征服するものハ鐵道や自動車である。而して其
の機械を働かせる動力ハ何かと云へハ、石油即
ち石油から出るガソリンである。石油を多く有する
ものが勝ち、有せざるものハ敗る。油がなければ國家
が亡ぶ。油がなけれバ國家ハ暗いのである。石油ハ
當然であるが、今もそうであるが今後ハ更らに重
要である。

○露國の一端にクリミヤといふ海に面した所があ
る。絶景の地であるが、外國人ハ多くここに遊ぶ。殊
に露西亜でも帝室や貴族富豪ハここに別
荘を構へてゐて、離宮も勿論別荘も非常に廣
大壮麗なものである。革命があつて後、これらどう
なつたかと云ふと、離宮を始め貴族富豪の別
荘を没收して、それが今ハ勞働者の療養所となつて
ゐる。為る事ハどこまでも徹底したやり口である。
此地を訪ねた人ハここに行つてコンナ事を目前に
見ると共になる程勞農の天下であると感
ぜるといふ國である。

三月廿四日記

○横断に四十日もかかつたアラビヤの大沙漠も今ハ自
動車で廿四時で横断が出来ることとなつた。志賀重
昂の話しに自分ハ二十六時間かかつた、其の譯ハ
途中で夜であつたので車を止めて、携帯の

日本酒を温め一行と観月の宴を開いた為めに二
時間後れたといふて又追々此の時間が短縮せら
るることは疑ひない、空では飛行機が短時日で横
断することは勿論である、一層或る山師が飛
行機と自動車の競走を企てたことがある、其の
飛行機はベルギー王とペタン元帥の従へて乗
つてゐたら計画を立てたが、途中危険なこと
があるといふことから、是れは止んだが後また沙漠山
越競比となるであらう
○三千円の議員の歳費を六千円に増額せんとする
議員の図々しいのはまだ誤魔化し得ても党人の恩怨
を忘れて漫りに結托し、其救済事業を占めれば、これは罪

しては識者は餘りの我儘と指弾し、識者ならざる国
民も憤慨したが、政府与党たる憲政会の幹部は
鎮撫に努力したが、なかなか鎮控しきれないの
で、其の総務は才くて辞職を申出たといふ注意
面倒を惹き起し、果ては前者から党員に懇諭
してやつと議員の体面を維持し得たが、一時は隣
きも不平を鳴して脱党を企てたり、政府に喰つ
てかかる醜態百出した、議員も斯うまでやると、
職工の賃金値上論議と少しも異なる所が
無い、議員の堕落も甚しいものだ
○食物も他の物と同じく値段を撰ぶことが肝要
であるが、其の値段を加算することが忘れやすくなるは

此頃銀座通りのカヒーハウスで洋菓を食してよ
い名だと思はれたのが一ツある。夫れはエスキモー、パ
イである。長方形の薄い菓子で、外面はチヨコレー
トで包まれてゐる。中は何うと思ふとアイスクリームで
ある。氷菓からエスキモーを案じた所に趣を感
もしある。

（三月廿五日記）

○敢て報酬を期して執筆した譯でもないのに、時々
彼から七十円の謝金を寄せて来た。先方の求むる
ますく余が至本花集の経歴を認めて送つたのが
が四月號に乗つたのかいつであるかを載せた太陽を
見ると、エレクシヨンといふ一欄があつていろくの人
のが収めてあるのに、自分のもの長々簡畧でもある為め一両

一欄に収めてある。八頁に満つてゐるのに七十円の
原稿料は哂しいと思つたが、集まる所は各頁に寸下
の空白が入れてあるから原稿を七頁と打算
したのである。すると自分の原稿料は一頁
十円で済む。何故かならんが頗る下等のようで
も思い出すと一笑した。此前三宅花圃の自園
潤礼額を寄せた時も九十円の謝金を寄
せ来つた。自分は印刷費として博文館の此同
印刷所と縁交してみる。大橋氏は関係で縁
交の縁であるのに、其の雑誌から寄稿を依
頼して来た。文芸関係は別であるから余は議
したのである。併し文士のことを報酬などは勿論

頃待しまされ、日々えんであるのはあまり、描らず
謝金を受けれとあつても去こし氣お描かよくな
いろ多とも着給のまゝ菓子底の絵を並べ描
て体描のは、其人の常時手ぬ入る無用の古画代を描
ふなかで於南ひある所と
○坊間と同しを適する術のことく画意を得る手なし
僅この手左の三種を得るとか

一 篤所詩稿　　　　三月廿五日　　一冊

古宮本まで宮家よし　北村篤所の
詩文断をちあるか、蒐つて見しこと
なし。　北吉本紙をもろ枚以上
の大冊ある、巻尾に宮家の題跋あ

十二行

引取を無しまする珠ぞこ

一 龍眠花入古形　　　　一冊

これまで宮家に各種は龍眠花生る数十
を収むも、龍眠花生の説味を盛し
たる人の図しなるやうん、余ら龍と
米細をを統味を認し、一説を立て
ことを並物を思考しゐる折柄
此書を材料となすを得（べき）
歟

一 西洋学家譯述目録　　一冊

嘉永三年穂亭主人輯むる笠桐子居士の序あり、西洋切本より西洋訳本の名を西洋の家の他の著手より其の著者のひと収めあり、流れなる書名もわかりすあるやうすれども、今見当りて切つて浮雑もなのとゐれども、松雲堂道楽生（今霞僊としとる）の渉く出来なり、此の目録の外に翻訳に関する書目を古活字より刻行しなるなあり、なれども稀れなることなれども、なれども霞僊[illegible]し此書と略姉妹書とせば更らに可ならん、此の目録と翻訳に関するもの一切なり

◎ビジヨウブツク（豆本）一冊を贈り来る書店あり洋本にて縦本竪一寸許横一寸二分許のものにて細極めて細字本なり、標題にスボンス●エンジレニアル、テーブルスとあり●抜粋なる書は一千八百七十八年の開刊なれバ今より●十八年前のものなり、エ玄の家のテーブル、年を経りとて別に変化もあるまじ余が●架中洋豆本古今詩集聖書其他文学書の類も多く此種のもの未だあし、且つ今日書店とある抜粋のかくブツクは小と云ふもさびに二倍し三倍す、此の寄贈は余の最も喜ぶ所とす、

◎世界の大戦争が齎らしたる珍らしき事の内にて国際的

住民の交換を第一に生指せざるを得ぬ。それは希土両
国の住民の交換である。これは宗教を異にするキリスト
教徒と回々教徒とが互ひに入り交つてゐれば、その宗教
の異なることが風俗や人情の相違を生じて、互ひに和
さずして時々争闘を生じ、政府が残虐の所置を
敢てしたことは幾多の事実で、土耳古政府は常に
闘争の徒の自国内にあるのに困つて居た。殊に世界大
戦後国際聯盟が平和維持の為め土領の希民
族と希領の土民族とを互ひに交換することゝなつ
て、これが実行されたのである。個々なることが人為で出来ると云
ふのは実に珍なることである。さて交換の結果はどうかと
いふと損をしたのは土耳其で、徳をしたのは希臘

である。人民の数から見ると希人の土耳其を去つたもの
は土耳其人の入つたものに較べると差引二百萬人
も多い。土耳其へ希臘から戻つたものは三十五六萬
人しか無い。それのみならず驚くに於ても去つた希人の
方が多く、丁度希りしやで鉄工を受けてゐた農
民を此交換で充分得ることとなつた。此の交換で
寧ろ土耳其の方は困つたのである。此の結果は土
耳古は不利であつた。さて此の交換当時は両国の混雑
は言語同断で、互ひに戻し入れる充分の準備も設備
も無かつたので、只手の着け出さぬ月ことゝ究竟の
家族が雨露を凌ぐことも出来ず、ステーション
並に或十日も五十日も何の日を過す為め悪疫

を醜しさんが難ぜしよりも如何なる有り日も前なれ
ぬ惨状を呈したといふ、亦他面に於ても其筆は湯之
三日を送つてゐたよりは却つて殆て其地を去らねばな
らぬことゝなり、為めに家産を失つたよりも多く、を
れ等の不幸は言ふまでもない。よかあつたと云
ふが、さんの如く人為的文稿を強制して果して平
和を保ち得るであらうか、是より今後に徴する
の外はない

三月廿吾記

余が随筆類山陽五版尽きんとして昨今売れ行
きも漸やく走つて来たので、増補をかねて第六版を出
さんと出版部より余に任かせ、漸やく材料整理さと
納からかつて、開版以来諸方より寄せられし材
料を日々の雑録に貼りつけ或は筆録したるもの
を取調べて見ると、なかなか多数で、毎日雑録を筆
する冊子一冊ほどの分量がある、中には余の誤りを
正したるものもあるかも知らぬけれど、それは増補として
収めるとすれば興味が無い、他日全版を改めて組
直す時に訂正することゝして、差向追加すべき事
項を調べて見ると、およそ二三十頁を満し得
るものがあらう、余り追加の紙数が多ければ、冊子の体
裁が破れるから、多くも三十頁位に止めなければなら
ぬ、尚々正誤は他日に廻はす外は無い、今右に追補
すべきものを右に列記す

一 佐伯の漢文序一篇

一 米田画山陽米田翁生の図（写真）
一 同画山陽遺愛品陳列之図（同上）
一 山陽与雲華書牘（外史と関せ）（写真）
一 山陽妓袖咲の手帛と題詩（写真）
一 翁生の図の解説
一 遺愛品陳列図解説
一 袖咲手帛題詩と就て
一 佐伯の序に就て

十二行

一 外史に就て與雲華書
一 雲華に與へし枕二付山陽の詩并に雲華の次韻（可数の手追）補
一 外史につき石産に與へし山陽書簡
一 秦川の事
一 西宥帖の事
一 秋田の大夫秋川と與へし詩
一 圀南息翼巻
一 頼鴨厓の事
一 嶌道の山陽に就て抄出
一 徳富蘇峰の評
一 耶馬渓詩の事

一、一枚と漢年
二月瀬梅詩、

○三月廿七日早朝東美倶楽部の谷中林氏の展
観会に到り一時間程過る、例の伴ふ路々の目を慰
くものなし、僅かに録するに足るものは左の二點とす

一 やぶにまくわ　　享保三年版　五冊

此も古き謡をあつめたるものにて板本
珍しき稀覯のものなり久しく獲んこ
とを欲して果さゞりしが、今ふと嬉しき
ことを得たり、但し欄外く一本
猶け、補写を添へたり、さるにても
價ハ三十五円、不廉なれど右に今
稀覯の品とあれバ價おもえぬ　又云
川路叙詩の画帖なるべき歟

一 房総鐘銘拓本　廿七張

鐘銘の刻年尤も古るきものハ南北朝時代にして天正慶長に到る、珍らしきものなりけれハ房総二地の鐘銘を新く氣根よく集めたるハ珍とすべき點なり各紙に植松氏の印記あり

一 維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書

江戸末期の寺子屋制度を專ら調査したるものにて明治大日本教育会が杉浦重剛を委員長として調査蒐刊したるもの也 明治廿五年出版されど今得がたき書也、洋装なるが故に和装製に變して保存すべし

〇四 世界の大戦後に於て世界地図ハ一変したり、列強の属国として独立したるものあり、平和会議に於て強国の統治下に附属されたるものあり、戦敗国が土壌を失つて他国の有に帰したるものあり、之に基きて地図の色ハ塗り替へられたり、戦後の世界図ハ戦前のと大に異なるものあり、是ばかりならず、列強の形勢が変したる結果として新なる頭を擡げたるものあり、これまた禍乱の種ねと

なりしバルカン半島のことき、前とハ形勢を異にし、或ハ国際上さまで注意を要せさることゝなり、却て之れまで注意されさりし非耶殊に亜細亜方面の諸地方ハ漸やく国際舞台に上り来りたるものあり、尚ほ世界戦争ありて後ハ飛行機自動車ハ著しく発達し、更に[illegible]力従来交通不便の地たりし閑却されたる土地例へハアラビヤの沙漠の如き四十日路のを横断に費せしもの今ハ廿時間にて自動車に横断し得て地中海に出さる航捷路となりたるなど形勢の変化ハ驚ろくへきものあり、或ハ今後世界に雄飛の材料たる石油を得んか為め、或ハ過剰の国民を移植す

るか為め、孰れも従来閑却されたる諸邦に目眼を注せさるへからさることゝなりて、耳慣れさる地名の紙上に上ることも少なからす、今ハ古今の地理を其の様に学ふ折ハ主に欧羅巴の諸文明国や露西亜や亜米利加あたりのものに偏し、他ハ概略知らさるも可なりとし、日本ハ不文明国こそ今ハ却て頻々話題に上り、其の国名を知らされハ識者と人の談をも解し得さることゝなれり、其の様なれハ地理の教育方針を改めさるを得さることゝなりなり、吾等老人と共に更に地理書を復習することゝなりぬ、戦後独乙か独逸窮乏を告け、マルクハ甚しく下落したる為め日用の金の仕拂ま

何兆何億といふ計数ハ各家の基所にて日常の
実地の数をはなれて実用ハこれに困却し●数学を学び
且さればこそぬと嘆声を発しながらも吹きし
が地名地理に就きて⊕を見れハ⊕周数を抹掌する
能はず

三月廿七日記

○昨日石油時報の記者余が随筆雑誌執筆
を筆記に来り其言ふべき話題を選びたるを左の如
し

○不昧居　香信　雪舟筆　円窓　大徳
寺ニあり

○松江の名工　如泥のこと　鞆の中に紙
を結り並雑居の需に応す

○西郷南洲　拝啓　天下無双の観
角能加呼何に此字　南洲禅師にて
荒漠

○酒の礼讃　和歌十首

○平福と槃特　川柳

○石墨の発見

○昔し書籍を配せしこと　重野博士の
言ふ玉海と古の歴史　楠公楠木不易
こと等

○不立文字　宗派のこと

○饒舌実ハ狐の心理

○名のつけ様で珍味あり　白石山炭、エスキモ
ホッケ、トド、カレ、ふ、パイ

○軍事探偵決死の首途に　聖上の方を拝す

○地理書を漢文直さねばならぬ

○赤井青の四碩会で談話の當番は前田曙山で日探に就て一時に渉る談話をやつた、其の要略は左の如し

日探と云ふは日露戦役に於ける露軍事探偵の事で十二人の日本人が蒙古の鉄橋を破壊する目的で二月五日北京を出発しおよそ百日の行程を経て目的地に達し六人づつ二隊となつて一隊は鉄橋破壊を任務とし他の一隊は東清鉄道破壊を任務とし或る地點より別れた、沖禎介等は東清鉄道の方、

出かけそれも不成功に終つて六人共殺された他の一隊も目的を達し得た、其目的を達して帰途中の中に前田豊三郎といふがあつた、此人が曙山の友人で生存して後に語る者である

露国は日露戦に先つて兵を集中せんと努力しこれを阻止せんが為に決死の隊を派遣したのである此の前田豊五郎といふのは美濃の生まれで某法律学校に修学し商業的に進みつゝ徴兵にとられそれでやけを起し放浪の身となつて満蒙へ行つて漂泊し、其の軍隊生活をやつたことのあることが機縁となつて袁世凱の兵を訓

練する指揮役に備ふる者の目に止まりつれ、軍
事探偵を選ぶ事あり其の選に入りつれ、此の探
偵の内に軍人生活をしたことが五人、素人即ち沖
の如きものが五人あつたが、二月の五日各々北京を發
する前夜深更まで公使館に集会した其の時
幕僚の者を餞別に会せられたが伊集院公使
ハ彼等に命じて彼等を一室に導ひ入れた其の
室ハ黯淡として唯だ一隅に蝋燭が薄暗く
點じてあるのみで寂莫の氣が漲つてゐたや
がて其の點灯の蓋を引きこゝで白布を以つ
て覆ふた額があつて上に陛下の御影があつ
たのに初めて陛下におはするのであると氣つき

一同敬禮をなし、其の有様を見ると公使と
其の他武官ハ大礼服をつけて侍立してゐた、
黯淡森莫の境に黙々として御影を拝
し侍立者を見た時まさに森厳の氣に襲はれ
何とも言ひぬ心持で一般決死の意を強ふした
とハ前田君ニ聞の感ひあへ、何れも朝の五時
城門のあくを待つて三々五々ちりぢりに城
を出たが、何れも身を駱駝商人に身を窶し
嚴寒の氣節を選び蒙古人ソックリの
假装したが身まで襤褸を纏ひぬからぬ
貨幣までも身につけられぬ身なりは哀れ
なものであつた、ある地點に集会して發足

しれが、前途目的地に達するまで大山が横はり在るを
跋渉して蒙古の職務に達するまでは百難を覚
したといふから其の困難は容易でなかつた念
々二年余命ぜらることとなり蘭了もして居るを
偶然軍籍にあつたその五人が皆職務く
命ぜらることとなつた。命ずる事を行ふに当り、先づ
土砂を掘つて騎駄の積荷や各携帯の
馬蹄跡を盡く消し、を埋めなつて無庭傍に
て出かけてみると、其の附近に突然野営
を張つてゐる露兵に逢着され、前田は辛ふじ
て逃げたが、一人は終に捕へられの身となつた。或か
し捕へられた四人が逆に職務に爆弾を装置し破

壊の目的を達し、無線電柱を切り倒し電
信を不通ならしめ、三晝夜線路を忍び巡廻し
辛ふじて敵手の縛を免かれたといふ。沖等
八人は東清鐵道の方へ回りゆく計畫中沖
外一人は或る原野に一軒家のあるのに入りて火を
焚いたがその烟が露兵に認められ遂に無二者
ぐ捕へられたといふこともある。前田等は辛うじ身を
脱して奉天陽の鐵道すら馬賊を率へて戦
地にある任務を取つたに馬賊等は敵と近づか
ぬ中には頗る元氣であるが、敵と近づくと物
の用にならぬ、何れも脱兵続しで逃亡し民
家を荒らし掠奪をするのが頼み

のし餅

もちの目録

餅書

ろうず、掠奪の破れの支日本に悔する不利が
あるは如何に国愚の気りと差かつきし後は
八馬賊を利用することが流入んだ
これが本書ある前田曙山が支那に支へ入れ
話を語つたあらい助ひある、袁世凱は暗に日
本を助け、其の中より探偵を出し保護し、支那
の兵営に内々会する所ありBの合図をなす
ことあれば、その者を保護でもよとあつたといい

○伊勢松阪の旧家なる兵術好んで餅に関す
ることを集め一館を建てゝ自ら考へ、左の目録に
載することの其一班也

月に望月の名あれば、餅に萩の餅櫻餅の名あり、正月の鏡餅より、師走の餅花に至るまで、年中かき餅の缺くこと無く、幾よ餅のいく世盡せず、棚より落ちし牡丹餅の果報ありて、餅で頰うたるる仕合せ、木に餅のなる喜び、もちこむ大福、五福餅、七福神の布袋餅、金もち藏もち千喜もちなりとも、金が大きくなるさ云へば、めでたき祝の鳥の子餅、歌賃さいへば、雅味あり、鬪餅といへば趣味あり、酒な惡くめる聖あれど、佛も善哉々々さ日ひけめさ我田へ水餅も、君子の交り淡き粟餅の曲なるべしと、ものもちの餅舍のあるじが、もちものの餅に因める品々をもち出して、同好の友に見せばやさ、この目錄とはなしぬ、榮耀にむいたる餅の皮とは思ひたまひぞ。

大正十一年の春

鶯や餅に糞する緣の先にて下戸の竹淸筆をさる

餅舍額　華頂山管長山下現有師筆
大和名物おびとき餅額　嘉永二年江戸萓齋筆
長命寺櫻餅　伊藤東圧筆
堀川餅
古代 八ッ橋ちまき餅　安藝國宮島
同 杓子餅
古 吉野櫻餅
古 大佛餅
古 關川名物粟餅
近江多賀壽命餅　素月筆
時代 三井寺辨慶力餅　水谷財仙堂氏寄贈
古 桃太郎餅

古 のれん　數種
外宮御臼殿の杵の先　三井源右衛門氏より御寄贈
生蕃餅臼杵
朝鮮臼杵
市川團四郎歌舞伎小道具用張子臼　田南岳璋氏より寄贈
鴻ノ池新田石餅臼　上野玉水氏より寄贈
奈良東大寺餅取木鉢　弘安三年東大寺朱書あり
東海道岩淵粟粉餅取器　慶長時代
大阪府下十三燒餅鍋　同餅屋寄贈
餅札集　數冊
餅畫葉書　數冊
團扇　いろ〳〵

餅屋板　數種
餅之根付　數種
餅之之枝　いろ〳〵
餅之玩具　いろ〳〵
諸國名餅　標本實物ピン入
座ふとん　菱餅形五枚德川家御寄贈
投餅看板　置看板
高砂餅搗　木彫飛彈高山亮犀作
鎌倉時代鏡開　博多燒
太閤　浮舟作
尉と姥餅搗　大島嘉樂作
餅雛人形　久保左四郎

臼形ひん掛　永樂作其他
臼手焙　今戸半七作
同　伏見嘉樂作
煙草盆　廣見餅其他數種
大福重餅釜　柏齋作
臼形釜　元祿時代定琳作
諸國名物餅圖　清水清風筆
重餅にうぐひす　上野玉水彫
杵花生　數種
善哉餅之文　清岩和尙より千宗且へ
宗和餅之文
道喜の朝の物　添付つるべ餅形道喜傳來

直指心源禪師入餅店之語　不昧侯贊伊川院繪
名月兎の圖
花より團子　書贊　手島猪庵
玄猪御祝之圖　土佐光文筆
銀杏餅文　千玄玄齋
鏡餅　書贊　錄々齋
鏡餅　書贊　支考
鏡餅鼠之圖　是眞筆
德川賴倫侯　重餅御合作
古代 吉野葛餅　餅高槻
江戸 おてつ牡丹餅　盆五
角田川櫻餅　盆茶器

京都嵐山櫻餅　茶器
京都大佛餅　茶器
奈良わらひ餅　盆茶器
姥ヶ餅　盆茶器
伊勢赤福餅　盆茶器
太宰府梅ヶ枝餅　盆
北野長五郎餅　盆同家より寄贈
兎之畫　大盆　巖谷小波筆
其他名物餅盃鉢　數種
伊勢太閤餅机　筆硯數種
古代 姥餅急須　財仙堂樂泉氏寄贈

京都嵐山櫻餅	茶器
京都大佛餅	茶器
奈良わらび餅	盆茶器
姥ヶ餅	盆茶器
伊勢赤福餅	盆茶器
太宰府梅ヶ枝餅	盆
北野長五郎餅	盆同家より寄贈
兎之書	大盆　巖谷小波筆
其他名物餅盆鉢	數種
伊勢太閤餅机	筆硯數種
古代姥餅急須	財仙堂樂泉氏寄贈

ろうずい、掠奪の破れの為日本に悔する不利が
あるはめての因果の到りと兼かつきし後は
八馬戦を利用することが述んだ
……文へれ
……噂に日
……支那
……を尊す
……けんとい
……に関す
……國銀に
○伊勢
こゝの
載す

もちのやはかき

いつはりのなき世にありかゞみを
さへそなへもち餅をきなはら八朔の
豊もち実りの頃をしるしよき
稀にふくらやほうらうかまれ
名物のありし中にも餅の名をとりて
祝ひて集まりて家族を祝ひ来る節句
ちるしちからもちのちからを こゝろ 安倍餅
中むつまじき人のかんとか めでたれの
送る周まての祝ひよなき印き
祝ひとし四方はめのかをし縁れ
甘きは集まりきたれは名物もし
世にありといはふ餅のなきやさもちの
祝ひかなくしたしみて 亀餅とんふ

伊勢餅舍

の新聞雑誌の主筆となつた牧伴純は変つた男だ

帝大を出て年もとらぬ、別の豪富の境遇ひとの

のに、田舎生活がして見たいと、多摩川吉野村に地

を求めて大工の手をかりず、自分で粗末の家を

作りそこに起臥した、不便な地で川を渡る橋

もなく、時々は公務中をきれ、舟をかへて銭を返し

たこともあるといつてゐる。然るも仙人じみてゐる

が、敢て哲学を研究したものでもなく専攻も経済

である。所謂常識もある有趣の男である。家あり子

も既にある者が、此の田舎生活をなして居る者を伴ひ同

棲したといふ。家を作るにも算を要し全く人手

を藉らぬといふ出来ることではある

旧巡の家

丘陵の上にある

十二行

附近図

○古本屋から新著百種の二人比丘尼色懺悔を
探し出して些か寂寞を覆して懐かしく感
じた。此本は明治廿二年三月吉岡書店が新
著百種を発刊する初號に出したのである
ことを此本に第一輯とあるので知つた。吉岡
書店の主人の吉岡哲太郎の出した書店で
ある。巻首に坪内逍遥の序のあるのも嬉しい
紅葉の自序も載つてゐる。逍遥の序は其
頃の筆ハ辭が濃つてゐる、文章を整へて紅
葉が其頃から始めかけしてみても、逍遥より
上手であると感じた。紅葉の序は終りに文
体に就て二三ケ條言つてゐるので

一、義経は浄瑠璃体に今時の俗語調を
混じたるもの、惟ふに之を以つて
時代や説の雅俗体なんとの作者の野
心とある

此文体は紅葉の初めての試みで、後まで此体に遊
した。詞藻は西鶴と一種の風味がある。文章の
流家のやうにいろいろのカットが色摺りまでの
を挿入されてゐる。紅葉は新和から言直して
撰つたことがうつてゐる。絵は芳年で三枚入
つてゐる。筆は段艶彩、紅葉の文と相應じて
よく調和してゐる。奥附まで一冊の代金十二銭
とある。今此書を手にすると隔世の感がする。

近く東京並び両濱驛を作るの云はれが、東京ハ
京本社店の趣がある　　三月廿九日記

○明治五年東濱間に最初の鐵道布設をやつた
ことまつきこ其時の記を簀記させた丁度其日石
井研堂に初めて会しても研堂ハ明治初年の紀
念物をいろいろ蒐集して居つて、示された中にま
おもしろく感じたものが一つあつた、それは明治
五年に初めて英國に發注して日本の東濱間
に運轉した汽關車に裝著して有る英國汽
車製造會社の商標を記したものである、それ
ハ楕円形の金屬製の鑄出物で、會社名や
番號其他が刻されて居た、[redacted]年八
十二とあつたから正しく明治五年と解る、此の紀念（實ハ七一とあつたから）
物ハどこにあるかと尋ねたら、長崎にあつて今も
使用されてゐる、それを前年頼まれて面倒をして模
拓を作つたと云ふことである、これに就て端
なく憶ひ出したことハ前年自分の郷里新潟
縣の新發田に、あの藤錦といふものが馬車
會社を起したことがある、頗る舊式の馬車を
用ゐて、自分も是に乗ると云ふから、其の云ふ位
から、馬車の来歴を尋くと、新潟縣廳から
拂下を受けたのだといふ、乃ちこれが縣廳で
初めて備付けた最初の馬車であつたが、それは
楠本が縣令であつた時か、其次の永山の縣令

の時であつたハッキリせぬのが、一種の紀念物である
ことハ言ふを待たぬ、自分ハ車中よりあまり近きを
すきな古風の馬車でハ旅が円滑を缺き乗心地
ハよくないが仕へなくして棄てることの惜しいよ
うと思つた、約五十年の汽関車ハ馬車よりも一
層大切な歴史物の意味がある、何等かの古
跡で保存すべきものであらう　三月廿九日録

○郊外といふ雑誌ハ「タバコ號」を出刊した
のハ昨年の事である、コンナ雑誌の出てゐること
すら知らなかつたが、此の特輯號偶然手に入
つた、讀んで見るといろいろ烟草に就ての説がある、
雑誌ハ保存に値する、今左に一節を抄出する

（前略）シガーの先や、パイプの一番から立ち昇
る煙の紫であるのと、口に吸ひ入れて吐き出される
煙ハ灰色か褐色を帯びてゐることに氣付
くであらう、何故であらう、元来烟草の烟ハ
空中に浮游する固体乃至液体の微粒子
から構成せられてゐることハ前に述べてある、烟の色を
之等微粒子の大きさと化学的成分とに因る
のである、微粒子の大きさが増加すると色も
から、、、之ハ空の色を示す理由である
ールのペクトル順に変化して行く、然して見れ
シガーの先端やパイプの一番から立ち昇
る烟ハ、熱の為め完全酸化されて分解せられ

為めに乳骨は小さな微粒子となつてゐる
従つて此等毛も帯びるのであるところが
胴を吸ひ込むと、口中のみ今とこの最小の
微粒子とは吸着して、比較的大きな微粒
子又が吐き出されるのである。色は灰
毛を示すといふ訳である

○菅久纘美雲堂方に山陽自刻の銘ある杖と
それに附属する書簡とを愛蔵してゐるのを見り
え来りたることのあるよし。を大きな其の杖を山陽が茶
山の死後片身に貰ひ、珍らしく大塩中斎に揮
毫を頼んだ杖のことを早苗氏に話をしたら書

簡の旨を見ると、其の杖では茶山生前に貰ひ
受けたものを姫路の川合漢年方に置き忘れた
前のものであることが分かりた。杖は布袋竹と云
ふ竹の多いもので、扶卯の二字山陽自刻也
西帰之時西者行（去年冬）大阪に帰て而篠
崎に頼まれた、造らせ其後如何あ
らせましたか目出度存候。先日は杖とる
りまし紙して成りましたら解しアノ杖
は不杖不用と滞在する二何ひ事何なる
をも申すなく来る杖とゞ初には見
り不申（先生西遊之時茶山先生の
恵まれた杖遺忘して御預に相成居に至り茶山

翁手つから園中の竹を切り杖ハ古致の労
をなすけを者とて不拙に絵り旅中の徒
然手つから彫刻いたし日々打用を見
君家のそれ者と逗留いたしトント忘又
然其後ハ已に年数ハ也集末ニハ為此
茶山翁之組志有り文山老と云を以
すみも相之候得ハ何本かせとを同行に
思召まあ去く御用となトントいつ
却る及かしを酒盃にハ御堂をいと
いふし一笑ヽヽ

十月五日

河合本識拝 様参

襄

此杏翁隠中山陽増補の時添加したるもの、
同しく姫路に縁因ある山陽の詩巻、愛石春
墅の図、これも増補料と供すへき歟

至徳寅郎今在此併将水月酎三杯切
若一合一灰冷久、恐被洞簫吹起来

為伊奈雅契題

襄

采香ニ云

往歳文政乙酉秋冬之際頼山陽翁應吾旧
藩大夫河合漢年君之聘過于仁寿山荘
教授生徒々々大所有進益矣翁中十月之
理儀坂翁亦墅之招呉愛石師及吾生

讀五峰遺稿　佐伯仲藏　稿

阪口君五峰。以經世自任。而其所爲之詩。雄渾高華。清深雅麗。若讀史五言短古二十三首。可見其本領。蓋在近時政黨員。絕無而僅有者。勺水先生稱爲以經世之餘。入作者之域。允當矣。且其爲政黨員。議政處事。操守堅貞。始終不渝。此尤可尚。豈於忠厚惻怛之敎。有所涵養而然歟。讀畢。感歎久之。

日下勺水曰。五峰身後之知己。用筆簡該得要。

數輩浮舟游于十芝蓬萊之下、吾父環翠亦陪焉、時天色清爽、旭光擁天、擧酒誦赤壁賦、或詠歌詩、賦畫共歡、情美酒間乗興、愛石師因畫之、八面贊之、以贈父、父甚喜、謹傳之厚、裱裝之以愛玩焉、距今五十有九年、然翁及父為泉下之客既久矣、想往時不堪追慕、乃思清因讀其顛末於軸匣、以慰中情云、于時昭和十五年一月廿三日　不肖伊奈環謹識

三月三十日記

十二行

北陸御巡幸の歌

飯島花月

（櫻痴遺文）

福地櫻痴居士の遺文に「北陸御巡幸」といふものがある。明治十一年八月三十日聖駕東京を發し、東山北陸東海諸道を巡幸せられ、同十一月九日東京に還幸あらせられた道の記の韵文で、東京日日新聞の社説欄に載せられ、其の當時可なり世間に喧傳したものである。

この種類の韻文を亂譜と稱する由其頃の人に聞いたが、出典は詳でない。その淵源は遠く平家物語や源平盛衰記に發し、太平記なる「俊基朝臣關東下り」「上杉畠山北國落ち」「大塔宮熊野落ち」等雄麗の傑作を出し、後世未だ之に較ぶ可きものあるを聞かぬ。されど足利時代の宴曲郢曲謠ひまたは小説の道行文のうちで、是等に摸倣した作の見る可きものが少からずある 従つて江戸時代の淨瑠璃又は紀行文などで之に倣つたものも多いが、概ね優孟の衣冠たるを免れない。

維新前後に彼の「俊基關東上り」が志士の間に愛吟せらるゝや、新に久坂通武の「七郷落ち」、平野國臣の「月照九州下り」などが出て、慷慨激切の詞章や、凄絶悲壯の吟聲やで、當時の士氣を鼓舞したことが少なくなかつた。其後信夫恕軒の「大石良雄關東下り」が出來た。近士太平記の東下りの文を改竄したものだが、翁が常に自賛された如く、頗る佳作だが、處々太平記を踏襲した嫌が無いでも無い。其の他東箏歌や琵琶歌などに往々亂譜として朗吟すべき「城山

十二行

おろし」や、「王政復古」の如きものも有つたが、櫻痴居士の此作を能々朗吟させる爲に作つたものでは無いが、逌に佳什である。往々語調が晦澁に陷つた點もあるのは、多くの沿道の驛名を洩さじと聯ねたから、自然已むを得ぬものが有つたらう。兎に角居士盛時に於ける得意の作と見られる。今明治天皇の聖德を追懷し奉ると共に、居士の彩毫を偲ぶべく全文を採收する。一には近年斯ういふ樣な韻文の作あるを聞かぬから、温故の資料に成らうとも思ふからである。

頃は葉月の初めなれば　まだ板橋に霜おかねども
秋の柳の千筋には　既に旅情を縮ねたり
蕨浦和を打過ぎて　氷川の社を見たまへば
御沼の池の名殘てふ　祠の池の水清く
影すみまさるこゝちして　上尾桶川鴻の巣や
御幸の恩に隈なきを　熊谷男久下乙女
悦び合ひておがみつゝ　めぐみも深谷本庄は
旅寢の日數の淺くとも　はや上毛と岩鼻や
並木の道も倉賀野の　厩橋高崎烏川
聞けば船橋夜をかけて　月にぞ渡る旅人の
歌さへ思ひやられつゝ　板鼻安中大坂の
坂はけはしくあらねども　雨ふりまさる山路には
御車寄する松蔭も　なきはいづこぞ松井田や
碓氷の川に水薦刈る　信濃の境に入りたまへば
深山の楓もみぢして　秋のあはれを増すさまは
吾嬬者邪とのたまひし　倭建尊の御名殘ぞ
思ひ出されて淺間の山の夕煙　とし經て消ゆる時ありとも
いかで忘れん大君の　叡慮ぞ深き科野川
小諸上田や丹波島　御世は千歳に長野ぞと
諏訪の社を遥拝し　打つ拍手や柏原の
關川くれば越路なる　頸城の山跡見坂
高田潟町柏崎　青雲のたなびく日すら小雨ふる
彌彥山の山風に　車のきしり遲くとも
みゆきの道ははかどりて　新潟新發田三條や
長岡の町みそなはし　又も濱邊の道傳ひ
行方も長き長濱に　人の疲れを絲魚川
親知らず子知らずと　昔よりいひ傳ふ
海と陸との境川　富山高岡打こして

三越加賀の要所とも　斯くも隈なく國見して
近江の國に入りたまひ　鹽津長濱鳥居本
琵琶のみづうみさゝ波や　滋賀の都を見たまひて
平安城の大内に　著御ありしは十月の
十五日にてぞありける　斯くて又
程なく西京をたゝせたまひ　又もみゆきに逢坂の
山越えはてゝ大津の里　野路の篠原行く人も
とまらぬ程に荒れまさる　玉川の跡埋もれて
我身時雨はふりはてぬ　老蘇の森となりぬとも
君が御代をば守山と　神の誓ひの尊くも
けふの御幸は後の世の　君の鏡と鏡山
うつしとゞめん鳥居本　番場醒ケ井柏原
近江と美濃の堺なる　寢物語の里すぎて
不破の關の戸朽ちはてつ　鎖さぬ御代に逢墓や
大垣の市岐阜の町　加納の里も打過ぎて
はや尾張路や一の宮　清洲名古屋愛知潟
汐干にけらし加多の浦　秋の日いとゞ短くて
日も夕暮に鳴海の濱　三河の國の八橋は
蜘蛛手に夜るの霜おきて　矢矧の川に長居せそ
我れ岡崎に人や待つ　夜はほの〴〵と赤坂は
濱名の橋の名のみにて　一筋遠き濱松の
つれなき色も秋はなほ　波と風との聲淋しく
見附袋井日坂や　さやの中山なか〳〵に
旅寢の床に風さえて　夢結ばれぬ神無月
大井の水を打渡り　靜岡の里田子の浦
富士の高嶺は麓より　晴れてぞ見ゆる小春の空に
叡慮を慰めたまひつゝ　沼津三島や玉くしげ
箱根の山の峯こえて　待つに月日は小綯綾や
鳴立澤の夕暮は　げに哀れとやおぼしけむ
戸塚程ケ谷すぎたまひ　神奈川驛より汽車に召され
東京に還御あらせ玉ひしに　十一月九日の御事なりき
げに有難き事にぞある

枯骨緣起（廣南從四位白象君）
享保十三年交趾國より鄕大威なるもの廣南に産する所の大象牡牝二頭を率ゐ來りて本邦に貢献す。翌年四月長崎より大阪を經京都に入り禁腋に朝して天覽を蒙ろ。爵位なくして禁闕に參入の例なければとて獸類といへども從四位に叙せられ、廣南從四位白象と稱へられたりといへり（江戸名所圖繪四卷）

—— 初期の『東京日日新聞』に現れた文藝記事について ——

十五日のには、各新聞社主が府廳に呼び出されて、紙面の改良向上を説諭されたことが載せてある。今日と比べると面白いので、次ぎに全文を掲げてみる。

一昨日十三日新聞の持主を府廳へ召され、新聞は開化の今日最も缺くべからざるものなり。然りと雖も多くは舊聞のみを擧げて新なる文字の意を失せり。是强て一冊にまとめ、一紙につばめんことを欲するの所以ならん。之れに加ふるに高價たり。たゞ新聞は疾きを旨とし、麁紙刷製を論ずるものならず。況んや書房繪双紙店等へ步を運ばざれば求め難きなど、迂遠の甚しきと云ふべし。居ながら廉價に求め讀み終るの後、枕紙手拭き紙等に下すこと、各國新聞紙の趣意なり。爾後能々注意して以つて新聞の新聞たる所以を失せず、規模壯大の期を計るべしと厚き御說諭ありしは、實に吾黨の幸福にして、ゆく〳〵新聞の隆盛を計 基なり。

これを見ると、當時は當局にも人物のあつたことがわかる。けれどその御說諭がすべて實現されてゐる今日では、報導が早すぎて、その筋の御說諭が蒙ると云ふ世の中となつてゐる。

四月四日のには、當時市中で流行した『二本さしたるお方を見れば、醫師に神ぬし相撲取り』の唄を掲げて『拙き一唱歌と

いへども、士は悉く脫刀し、昨日の風習更に地を拂ふ如くなり文明進步の光景を知るに足ると云ふべきか』としてある。守田座の勸進帳を見て、ある外人が感激のあまり、權之助の部屋を訪れて、寫眞を所望し、その禮として卷煙草を與へたと云ふことも、この日のに記してある。四月七日のには

一昨五日第一大區役所へ守田勘彌及び狂言作者河竹新七、櫻田治助を呼出され、抑々演劇の儀は勸懲を旨となすべきは勿論ながら、爾後全く狂言綺語と云ふ事を廢すべし 譬へば羽柴秀吉公を眞柴久吉とす。童蒙若し久吉を以つて豐公の名と覺え、春永を以つて織田氏の名と合點せば、竟に事を過つに至らん。其余すべて事實に反すべからず。强ち堅きを是とし洒落を非とするにもあらず。淫哇滑稽にも亦教となるべきあれば、よく是等を注意し、外兩座、他の作者へも傳達あるべき旨を說諭ありたる由なり。

とあり、また續いて五月五日には、次ぎの通りのことが載せてある。

猿若町三丁目守田座五月狂言は、先般官諭の旨意を奉じ、長矩義英及び良雄以下の義士輩、すべて實名を唱へ、脚史の實說に由れる趣をその筋の者より聞き、ひそかに感服なし、既に前號にも書き載せしが、昨今配達の番附を見るに、聊異なる處なく、從來の忠臣藏なり。その飜案なせるは、昨日の後ろへを厭ひし故か、蓋し實名に未だ差し支へありたる故か、大に冀望する所を失ひ實に遺憾と云ふべきなり。

とある。當時の宣傳と云ふことなどが偲ばれて面白い。

八月二日には、文部省で初めて圖書館を設けて、八月一日から開館したことが載せてある。その布令の第一條にはかう記してある。

方今人才敎育文化進步の爲め、今般東京湯島博物館中に於て、書籍館を建設せられ、從來府庫收藏の和漢洋の群籍は申に及ばず、其他遺漏する所の書は追々之を館內に蒐集し、普く衆人の此處に來りて望む所の書を看讀するを差し許す條各其意を體し、有志の輩は無憚借覽願出可申事

每日朝八時から夕四時までゞ、入館料の甲乙の二部にわかれ甲が半月以下三十錢、一月五十錢、半年二圓、一年三圓で、乙は各半額である。休日は大祭日と、節句だけである。同じ日の次ぎの欄には、兵庫縣令の神田孝平氏が『實に敎育の良法、文明の根元』とこの擧に贊意を表して、早速次ぎの本を寄附したことが載せてある。

御風要術二卷、金石識別六卷、製火藥法一卷、運規約指一卷、開煤西法二卷、汽機發靭四卷、汽機必以四卷、化學分原二卷、航海鑑法二卷、晌股六術一卷、仙學鑑原四卷

八月十二日には書籍館吏の市川清流と云ふ人の寄附書が載せてある。

中井竹山國字牘十二、草茅危言摘義五冊、阿夏眞保志一冊、和漢類語二十二冊、運歩色葉集四冊

十二行

十二行

十二行

十二行